第四百八十八號目次

◎社說
宗教に對する超然內閣
續海舟餘波(二)
教育界二個の新斧手

◎評論
佛蘭西革命の無意義（靑柳有美）
時事評論（山下石翁）
（川上總長の薨去。英智交涉。伊藤侯復た出るであらうか。大隈伯。板垣伯。政黨四人男。樺山伯の文部大臣。山縣內閣の運命如何）

◎女學
嫉妬心の研究（無識庵東根）
妻の不平
近松女氣質(其五)　　櫻井鷗村
　胥庚申のお千代

◎隨感
情火胡蝶を招く
心霧、面上にかゝる
天上の鳥、野の百合花

◎雜錄
いかづち物語（久保ゐの吉）
戀の霓歌（有美）
（悶に苦める夜。寄小町。吐鵑を聽きて。夢。胛が爲に語らずや。吹けよ小供。或る微笑に巧なる加奈太の婦人を見て。痰に血のかゝみて出ければ。さる戀に苦む男に代りて。まための夢）

◎時事
樂評手前味噌（靑柳猛）
（音樂學校春季演奏會。同聲會春季演奏會）

◎片々

◎時報

◎附錄
海舟餘波評第三回

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。
◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみに指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金		
壹冊定價	拾錢	（內國無郵稅）
半年分定價	壹圓拾錢	
一年分定價	貳圓	

代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事

廣告料		
一行(廿七字詰)一回		前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金　送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十二年五月廿四日印刷
明治三十二年五月廿五日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工塲
（電話本局十九番）

◎婦人科
◎小兒科
專門 至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として温柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを良家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし語を交すをさへ道に缺くるものとし畏るべき病症殊に子宮疾患の如き醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を夭折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや　本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで尊榮にして深邃なる醫學に志し研鑽多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて呢み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美徳を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科にありては第一の慈母として狎れ懐き易きが故に幼兒をして畏ぢ懼れ尖聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ　本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山彌生　診察 本院午前、分院午後
本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町一番地
至誠醫院

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十二年五月二十五日發兌

第四百八拾八號

社説

宗教に對する超然内閣

雲霧超然たりと雖ども、降つて雨露となるを妨たげず。今の所謂ゆる超然主義は、柳下惠の超然か、抑そも伯夷叔齊の超然か。

曩に内閣の人屢ば言らく、吾は超然たりと、而して其の超然なるものは總ての政黨に近よらざるにありき。夫れ、近づかずして冷遇し、關わらずして他人扱かいにし、以て漸やく其の利害の區域外に立つ、眞とに憫れむべきの超然なる哉。

牡丹餅を棚にあげて手の届かざる所に置き、菓子を簞笥に入れて目の見へざる所に隱し、而して椀白子僧の之を奪わざるを名けて超然と云ふ、吾人も亦た其の稱を襲ふて之を超然と言ふヿを辭せじ。但だ其形容を添えて、之を『憶病なる超然』『不信切なる超然』『知らぬ顔の超然』『半兵衛の超然』と言わんとす。

若し、政界を退ぞきて山林に入り、平人と爲つて臺閣の責より離れんとせば、斯の如き主義の超然も亦た一興なり。然るに、身尙ほ其の責を辭するヿをせず、心依然として王佐の命に任ずるヿせば、邦家の一機關、國民の一事業に關して、故さらに知らぬ顔をして、無理なる超然を襲はんとする、果して可なる乎。超然の賞すべきは、其の公平なるにあり、其の無關係たるにあらず、其の賞すべきは依怙偏頗の事に無頓着なるにあり、初めより冷淡にして總べてに無頓着なる不信切を賞するにはあらず。今人の依つて以て超然の名を利用する所は、寧ろ其の憶病を隱すの一方便たるに過ぎじ。

若し一視同仁の雅量を抱きて、清濁幷せ呑むの識見を有せば、衆生は皆な吾が子、國家の諸機關は總べて帝土の生命にあ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

らずや。何によりて之を無頓着、不信切、冷遇に置き、以て僅かに超然の名を爲す可きならんや。臺閣、もし政黨に對して超然たらば、惣べての政派政黨に無遠慮に近づき、一様に交渉すべし。其の惣べてに遠ざからんとするは即はち超然の主旨にあらざるべし。茲に所謂ゆる宗教に對して超然たらんとするものの如き、亦之に同じ。

臺閣の人往々曰く、政府は惣ての宗教に對して超然たり、故に其の官公立學校內には惣て一様に各宗教を入るを許さず」と。之れ豈に眞との超然ならんや。彼は、「超然」の美名詞を借つて宗教を無關係に置き、以て万一の紛雜を避けんとす、其主旨、憶病より出づる也。

若し眞とに超然たらんとせば、何等の宗教が學校內に入り來るをも辭せざる、之れ即はち超然たるものにあらずや。之を防ぎ、之を拒み、而して曰く吾は超然たりと。天下斯の如き超然あらんや。憶病の人、泥棒を防ぎ、犬を防ぎ、蛇を防ぎ、其の身の圍りに此般の恐れ毫も無からしめて而して曰く、吾は超然たりと。諸君、點頭して『然り』と言ふか。

維新前の幕吏に鑑みよ、彼は耶蘇教を國內に入る可らずと制禁したりき。而も遂に耶蘇宣教師の入るとを防ぐ能はざりき。則はち讓歩して曰く、外國人にして宣教師の會堂に入るを妨たげず、日本人にして其門に入るものあらば、嚴罰せんと。而も、遂に之を防ぐ能はず、其の防ぐ能はざるの故に事煩を生じ、自繩自縛して困倒せり。今の政府其の綱紀の嚴、官吏の勇、外交の熟練を前政府に比較して大いに誇る所ろあるとを得る乎。

夫れ、無益なる徒法を制して、其法の爲に自から困しむもの、古より愚なる政士の屢ば繰反す所ろなり。亦又何の物好きによりて、益もなき徒法を試驗せんとするや。

夫れ、徒法は無きを可とす、有るも亦た大害なし、何んぞ故さらに激論するに足らんや、但だ今の政治家先生、屢ば超然の文字を朗唱し、揚々乎として其の義を高しとするらしきの如何にも可笑しきに由り、敢て茲に超然の眞義を一辨す。世上超然主義の黨よ、汝、もし眞とに超然たらんとせば、先づ「氣にする」ことを止めよ、氣にせず而して一視同仁に、憶病ならず、而して信切周旋し、些さかも退ぞけず、遠ざけず、而して、執着惑溺せざる、是れ眞に超然たるものに非ずや。故に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

もしあらゆる宗教に對して超然たらんとせば、其の各宗派の爲す所ろに一任し、別に其の大綱を一樣に管理すべし。是れ豈に眞實の超然たらずや。

昔しは退去令の執行者あり、三里以外、江戸お構ひの嚴命を下し、恐ろしき壯士を遠方に追へり。而して揚々として、「吾は總ての壯士に對して公平なり、壯士的超然なり」と言へり。

續海舟餘波（二）

◎前巻の『海舟餘波』「氷川のおとづれ」の末に、海舟先生が勝家の爲に嗣子を定められざりし一ヶ條を引いて、先生の破格の用意を例證したるに、言葉の不足の爲め、反つて之を怪しむ人の多くある趣きに聞いた。明治二十年、先生が初めて伯爵に敘せられし時には、無論、達て辭退せられたれども遂に其甲斐なく、甚はだ其の素志に反むいたることで、屢ば苦衷を陳述せられたのである。然るに、其后、嗣子小鹿氏の逝去されしに付き、未だ其の亡骸を棺に納めざるうちに早くも決定して、伯爵勝家の財産は悉皆德川氏に奉還し、せめて天恩を棄りにせざる精神を貫徹したいとの事で、死者を傍はらに置て、其旨を御家族に宣言せられた。『維新の際、命を殞し、家を失ないたるものも多く、此の方の爲に死んで呉たものも澤山あるのに、自分斗り伯爵だと威張つて居ては、どふして濟まん』と言はれたことが度々あつたのは、即はち此の御主意で、既に德川氏に奉還せられたる勝家の爲に自から相續人を定めらるる筈もなく、又德川氏に於ても進んで其の相續者を定められることも出來なかつた、慶喜公の御子を御希望はあつたのであるが、何のお方をなどと云ふ迄に確定して居なかつたので、總べて半垂半定の姿であつた。其の結果として萬一の際に華族たる資格の消滅することも無論承知せられて居つたのであるが、之は寧ろ望まれる所ろで決して避けられる所ろでなかつた。果して、先生薨去の后、勝家は一度び伯爵を失ない、茲に先生掛念の御主意も立ち、而して后ち更ためて格別の思召によつて新たに伯爵を授けられたること故、條理貫徹して、申し分なき次第となり、今更ら先生苦心の存する所を彌よ感服したことである。

◎先生が毎度賞賛せられたるは平岡丹波の事で、其の終を消

したる工合の如何にも自然なりしとを屡ば賞めて居られた。
『今ま平岡の末が如何になつて居るかを知る人も余り少ない。其終りは、手厚く臣下に配分して、眞とに立派に散じて仕舞つた相で、いよ〳〵見上げた人だ』と言われたが、先生が勝家の終を結ばんとせられたる趣むきも、之によつて畧ぼ想像することが出來た。

◎『慶喜公の御子を後に直すと云ふとも、何もかも、どふなるとか分りやあしないよ、ミンナ茫漠とさしてあるのだから。▲▲などは、孫娘を妻わせ樣と言ふのだが、夫は善くない。夫では丸で造つたよふなものだと言つて、どふしても承知しないのサ』と言われたるとあるが、勝家の家祿、家屋敷、古器物、刀劒の類迄で、悉皆徳川氏に奉還し、遺族は、屋敷を出て、千束に退隱されるとの準備が仕てあつた。且つ、伯爵に附た三万五千圓は右に言ふ如く、家祿として奉還されるとゆへ、其遺族のお暮、係り人の維持と云ふとには、非常に苦心せられ、漸やくの事で、○○○圓の清潔なる貯畜が出來た。之は、極めて純潔なる貯畜であつた。

◎「曾て商賣事を爲すつたとがありますか」と聞た時に、『一度もふけ事を仕たとはない、隨分、もふけるとは知つて居たが、決して仕ない』と言われた。眞とに先生の如く機に明らかなお方が、もし機に投じて商畧を施こされたれば、何程でも利益を得られるとは自由であつたらふが、實に少しも其邊のお心が無つた。夫れ故、此の貯畜は極々純潔の金で、先生の常に謂われた清財であつた。お上から頂戴せられたものなどがあれば封のまゝ、徳川氏に預けて追々公債を買われ、揮毫のお禮などがあれば、之も預けられて、多年の間だに漸やく此丈けの金(先生の苦心としては隨分小額の金)が出來たのである。『辛苦して、骨を折るほど、後に遺るだらふと思ふからチ、なまじの金は溜めないのサ、どふしても、血で溜めたものでなきや、殘りはしないよ』と言われたる、其の苦心經營の結果が僅かに此丈となつたので、もし今時の紳商などに聞かせたら、夫ッぱかしの金をソンナに苦勞されたのかと冷笑するほどであろふ。然し、此の類の紳商から、一夜十万圓の賄賂を出したとき、其の顏に叩きつけて之を辱かしめた程の氣象を以て、骨を刻つて清潔なる遺財を貯えられた御苦心は、迚も當世流の輕人が想像しがたき所ろである。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

教育界二個の新着手

◎教育界も亦た依然たる舊套を襲ね、陳腐彌よ熟し、生氣益々減じ、人をして轉たゝ敎化の効なきかを思はしむ。凡そ物究れば通じ、事困すれば則はち開く。今にして初めて二個の新着手を催ふし來れるは、時機の到れるのみ。何をか、二個の新着手と云ふ。曰く、塾舍一變の着手。曰く、學制一新の着手これ也。

◎塾舍は是れ、家庭より社會に入る途中の掛橋なり。半ば、家庭の如く、半ば、社會の如き、即はち其本來の性質とす。敎師、之を備えて、家庭の門に人の子を預かり、社會の門に之を送る。敎師は一面に於て父兄の如く、亦一面に於て社會の先導者たるが故に、渠が敎化を此の處ろに施こすは、太はだ適當を得たり。然るに惜しむべし、監理行き屆き兼ね、訓化殆んど行われず。大凡そ塾舍は宛然たる下宿屋の如く、一の制裁なくして、百の誘惑あり。少年相率ひて彌よ邪路に趨らんとするもの、滔々風を爲せり。現時所々の男學校に於て屢ば此の醜聞を聞く。其の大なる學校に於て特に尤とも甚はだしきを聞くもの、豈に悲しからずや。

◎學校は是れ、當代社會の養成場なり。或ひは普通に、或ひは専門に、或ひは、學文的に、或ひは、職業的に、之を養成するの差はありと雖ども、詮ずる所ろ、當代の需要に感動せずと云ふとなし。夫れ、立憲政躰の世や、普通敎育を要す。普通敎育や、諸學科の敎育を要す。諸學科の敎育や、諸種の敎師を要す。即はち是れ古の如く單に一人の敎師を師匠とせる小門塾の行はれずして、當代普く見るが如き學校組織の俄然として行はれ來りたる所以なり。而も、其の俄然として行はれたるや、立憲政躰の俄然として慕われ、立憲政躰の俄然として組織せられ、尚且つ立憲政躰の俄然として能く行はれ得べしと信仰せられたる、其の『俄然』に相伴せるものに外ならず。今や、立憲政躰なるものの本色次第に分明し、其行はるべき躰裁の稍や瞭解せられたるとともに、三十年來、漫りに醉迷せし一夢、忽然として覺めんとせり。故に亦た同時に、敎育に對せし盲目的摸倣の迷ひ、等しく忽然として覺めんとするに近づきたり。

よしや又、現代普ねく行はるゝ敎育制度を不都合なしとする

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とも、苟しくも、教化を主意とせる教育者が、一時に入門生徒の多からんことを希望する如きは、思はざるも亦た太甚しきこととす。生徒彌よ增加して、直接感化彌よ薄らぎ、單に驟雨一過の潤ほひをもて、少年熱渴の魂しひに灑がんとす。浸潤する所ろ、知るべきのみ。此を以て、有力なる校主校長と雖とも、學校の擴張につれて單に大躰の監督に役され、只だ但だ器關の運轉に勞することを爲て、直ちに人の子の溫養掬育に時を與ふること乏しきに至らんとす。若し斯の如くして、每年數百人の卒業者を出すとも、十年にして顧りみて未だ心に滿ちべき好結果を生せす。翻がへつて算すれは、年々只だ十數名の溫たかき吾門生を出し、十年にして其の十倍、五十年にして遂に五十倍の門下生を出したる濃厚の結果に及ばざることを覺らん。これ、其の人敎化の施こす所ろの結實に就て言ふ也。惟ふに、一時學風の隆盛に醉ひ、熾んに當代の流行に乘じ、宏大なる學舍を設置して、多數の生徒を集め、以て吾門繁昌せりと得意しつらん教育者の儕輩にして、苟しくも眞面目の反省あらんものは、今や既に此段の覺醒あるべき筈なり。夫れ、帝國大學の生徒にして、其の總長の顏を知らざるものあり。今の學風略ぼ察知すべし。たとひ、此の學制を以て已むべからすとするものも、其の弊を救ふに於て多少の感慨なくんばあらじ、今の時は、即はち此の感慨を刺激して、別に新着手を試みんとすべき機運を促がせり。

◎夫れ、塾舍の弊風殆んど極まれり、正に新着手を要む。文明國の學制に迷ひし醉夢稍や覺めたり、正に本來の思慮を要む。只だ一慨に校舍の盛大を希望せし結果の拙なきに經驗せり、正に質實溫厚の教育を要む。乃はち是れ、塾舍及ひ學校に對する新着手の將に行はれんとする機運を來せる也。

◎其法、他なし。學塾復古の策、これのみ。良家の家庭、もしくは、一門の古老、若くは、一地方出身の先輩、もしくは當代著名の先覺たるもの、各、相應の塾を開き、少なきは、數名多きは數十名の子弟を預かり、父兄に代りて保育するとともに、教育者に代りて相當の教化を施こすにあり。而して、其の習修する學藝は、各自所好の學校に行きて之を修むべき也。

今にして、此般の學塾あらば、其の行はれんは必せり。而して、其の好結果あらんとも亦た必定なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

豈只だ男學校のみならんや、女學校に於ては特に然り。女生、學校に於て學科を學び、學塾の家庭に於て家政風儀を學ぶ、太はだ稀なり。今や續々として新設せらるべき高等女學校の如きは、旨として此の方針に倚り、校內に大塾舍を設置せざるを可なりとするは明白なれども、蓋し人や一度び失敗の經驗をせずして直ちに正路に入りがたきものか、往々にして無益なる舊流行を襲がんとするものある、深く惜しむべしとなす。

◎學校に於ては、敎育者と敎授者との別あるべし。敎授者は猶ほ技師の如し。所々の學校に同時に聘せられ、今人の甚だ嫌惡するとか聞ける掛持敎授を爲して毫も妨たげず。敎育者は即わち其學校の棟梁なり、床の間なり、主人なり、精神なり。永久に此舍より去る可らず。而して、其の世話の屆き、其の愛情の屆き、其の感化の屆く區域に於て、相當の人數を定め、之に隨がつて經濟を定め、確乎安靜として、十年一日の如き訓化を施こすべし。

凡そ、學校の態度にして斯の如くば、敎授者たるもの、所々の學校に敎授し、同時に多數の學生に敎授するの愉快あるべし。敎授者に取りては、亦た恰好なる所望ならん。

此の敎授者にして、單に敎授を旨とせる一學校を便利の地に設立し、以て多數の學生に敎へんとするものもあらん。斯の如き學校亦た固より不可なし。此時に當りては、前述せる主旨の學校もしくは學塾に存るものにして此に通學するは將に多からんとする也。

◎嗚呼、物の新たに行わるゝや、需要、利益、名義、輿論の四者なかる可らず。而して、之を促がすに機運を以てし、之を行ふに率先者を以てす。機運は、舊弊正に究まり、人心殆んど倦むの時に兆ざし、率先者は、此の時勢の子となりて決然として斷行するの勇より起る。今や惟ふに、需要、利益、の二つはあり、名義やゝあり、輿論の未だ起らざる也。密かに觀ず、機運既に至れり、未だ率先者の多からざる也。然れども、大勢既に到る、區々たる人力の之を奈何んせんや。看よ、遠からずして、大いに此の新着手の流行を來さん。而して、此の新流行の勢を察せずして、旨として舊流行の糟粕に醉わんとするものゝ尙ほ多からんとす、豈に悲しからずや。敢て不肖を顧みずして一言の注意を寄す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

評論

時事評論

山下石翁

◎川上参部本部總長の薨去は如何にも殘念なことである。人の知れる功績は言ふに及ばぬ。彼の軍備擴張の計畫を立てたのも、此人で、亦た軍備縮少の輿論に抵抗したも、此人で、其勢力は、内閣すら尙ほ動かすことが出來なかつたと迄で言われて居るのは、事實は兎に角、優物に相違ない證據である。扨て、此の人の薨去と同時に、軍備縮少の意見が或ひは行われるであらうかなどと想像する人もあらうが、極めて迂遠なる觀察である。其の擴張を決行せしめたは、固より一時の人氣で、其の縮少の行なわれぬは、部下に故障のある故で、固より誰が一人自己の意見で反對するなどと言ふものではない。何故、部下が故障を言ふかと問へば、表面には色々の議論があらうとも、眞實の理由は分り切つたることで、總べて出世立身の問題である。此の急所に思ひ到らず、其の心配の救ひ方に考がえ及ぼさずして、只だ表面の反對論斗りを倒さふとするは馬鹿なことである。夫れ故、一川上氏の薨去は、軍備縮少論の勢力の爲に何の役にも立たぬ。又た、誰が總長とならうとも、此の部下の故障に抵抗し得ぬ人であらば、たとひ議論に感服しても縮少を行ひ得る人は斷じてあるまい。

◎英魯協商にはサスがに驚ろく。二國にサスが人物あることを驚ろき、又、其人物の說が着々として行わるることに驚ろく。若し分つた人物があれば、互ひに交涉して、馬鹿な衝突を避けるようにするのは勿論であるが、何處にも無鐵砲の慷慨家があつて、盛んに大國主義を揮まわすものである。能く此等の英氣を發露せしめて、相應に敵愾心を起させ乍ら、遂には巧みに交涉を纏めて行くと云ふは如何にも感心なことである。魯は北に、英は南に、天下第一の寶藏を開きて、盛んに天工を助くるに至れば、啻に支那人の幸なるのみならず、世界の幸わひで、亦た向ふ河岸に居る日本の商賣に大利益である。驚ろくと云ふは感服すると云ふことで、少しも憂ふることは無い、太はだ慶すべきことである。

◎伊藤侯が復た出るであらふか否やと云ふことを、大疑問の事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くに言つて討論するものがある。馬鹿〳〵しいヿだ。總理大臣の地に上らねば、事が出來ぬよふなれば、出來ても同じヿで、賴母しくも何ともない。あれ丈の經歷もあるヿゆへ、爲すべき事は、何處に居つても爲せ相な筈で、亦苟しくも侯を崇拜するなどと言ふならば、夫位は信じても善さ相なものだ。固より其位に居らねば、其の小印をつくヿは出來まい。些細な事は、其任に當らねば出來ぬヿ勿論であるが、苟しくも大臣などと云ふものに任ずるものは、小規小是非は、放任して善い筈だ。伊藤侯が是非再たび出たいなど丶思つて居るならば、面白くもなんとも無い。之を出さふとするものも見下げ果てた事だ。凡そ、太平時代に於ける名義上の大臣は、惡を爲さぬ好人物か、人が見て品の善さ相な人が好いので、其の外に別段望むべきヿはない。或ひは亦た變つた人物で、一種新鮮の心持を起させ、人氣を一轉さする樣な人が出るのも亦一興であるが、伊藤侯などには毫も其資格が無い。侯は決して惡人でないが、其惡人でない丈に、人心を倦ませたヿも亦た太甚しいヿである。人心萎靡、蠻勇と云ふ變則の勇氣をすら處望する迄に渴したる此の社會に、伊藤侯の再たび要路に立つなどは、甚はだ望まぬヿである。然し、侯が今少し老人とな、、艶聞なども無くなり、後ろの方の毛丈でも白髮となつて、古骨芳はしと云いたい樣な氣味が少こし出た比は、亦最一度行て貰ふのも愉快であらふ。今日はまだ油こくて、艶が多すぎて厭な心地がする。

◎大隈伯に至つては、まだ〳〵雄心磊々〳〵で、霸氣慨然たる趣むきがある。伊藤侯に對するほど政治的信用を置ぬ人でも、伯をして今一度思ふ存分にやらせて見たいと思ふ心がある。少々落雷があつて怪我をしても、夏のダルイ時には雷鳴を慕ふもので、大隈伯が世に渴望せられるは即はち此處の秘訣に存するヿであらふ。

◎板垣伯に至ては、半ば世から忘れられて仕舞つた。星亨の評判が出てからは、一層忘れられて仕舞つた。政治上に於て伯に望を置くものは、今后彌よ減ずるに相違ない。吾輩が此上の一所望は、願くは一度、伯をして大學總長たらしめて見たいのである。

◎大學總長が嫌だと言はれるならば、何卒、伯をして社會改良の鼓吹者たらしめ。民權擴張の昔に立返つて、一種の說敎

的遊說で天下に行脚して貰ひたい。左すれば、伯の名聲が再たび復活することは固より、伯の勇氣も亦た再生するに相違ないが、惜しひ哉、今の伯には此邊の望を措くことが中々出來ぬ。夫故、せめて大學總長となつて貰ひたいと云ふのである。

◎先づ四人男は、犬養毅、星亨、佐々友房、伊東巳代治であらふが、蟹が甲に似せて穴を掘る如く、四人とも如何にも夫々適宜の地に立つて、各樣の異彩を放つて居る。妙に隱れ、陰に計謀して、巧みに尻尾を出さず、而もいつでも急所を捕へて居るは伊東であるが、其評判の惡るい丈、其の敵の多い丈け、思ひ切つて遣り拔く勇氣がある。兎に角、一方に在て事實上種々の事業を成し遂げたるは、此の氣性のある故である。之に似て、更に調和的分子多く、隱れたり陰になつたりすることは同じ樣で居乍ら、伊東丈けの事業を成さず、其の代りに敵も少なく、惡聲も少なく、存外其仲間には賞められ乍ら、其の反對黨に恐れられもせぬは、斷じて遣りぬくと云ふ處置の足りぬからで。佐々がいつも鵺黨になつて能く之を纏め、纏め乍ら大したこともせぬのは、其處に能く其の性質を顯はして居る。星亨に至つては、秘密のない男で、一般世人が

見て、誰も評判する通りであるが、人の知らぬことを擧れば、反つて追々賞美すべき點が出て來る方で、存外の善人物である。然し、今の自由黨なればこそ惡で使へるので、昔しの自由黨ならば迚も出來ぬ。今の憲政本黨などに入らば、半分の眞似も出來ぬ。然るに、雜然たる憲政本黨に在て、衆望を集め、思ふことを遠慮なく放言し乍ら、能く之を纏め、陰然、總理の地にあり乍ら、黨員をして惡感情を持たせぬは、犬養の非凡な所ろで、此人をして此の成功あらしめる秘密の元因は肺病の故であらふと思はれる。犬養は憲政黨に入れても優に第一位を占めるに相違ないが、星は、憲政本黨に入つて、今日の地位を持つことは出來ぬ。伊東と佐々とは、互ひに其の地位を換へることは出來ぬ。然し、四人とも皆な適當の地を得て居るので、其の地を得て居ると云ふが即はち才子たる所以である。四人を見て居れば、四個の潮流が分る。其の潮流を見れば、イクラカ國家の流も分つて來る。便利なことである。

◎政黨者の取組は相撲の如きもので、議塲は回行院の樣なものである。相撲の方は、まだ少し劣つては居るが、趣むきは同じことで、必竟、取組を見せて、愛顧を買ひ、黨員と云ふお

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

客を殖すべきである。夫故、相撲の取工合を評すると同じ心持で、政黨者の特色を評判し、一種の余興とするよふになれば、政黨の取扱かひ方が大いに進歩したと云ふて宜しいのであるが、今日では、其の相撲取にも愛嬌はなし、黨員なるお客にも勸辨はなし、至極殺風景なるとで、立憲政治の一つの樂しみは奪はれて居るのである。

◎**樺山伯の文部大臣**は、西郷從道氏の文部大臣たりし時と同じく、存外の好結果あるべしと信じ居るとなるが、黄海の時の評判、內務大臣の時の評判に似もやらず、甚はだ無評判なるは、頗ぶる賴母しいとである。どふか、些細の事は才子連に任せ置き、大臣として實行して甚はだ有効なる一方法を施こされたいもので、即はち草鞋主義を見たいとである。所々の巡回に、例によつて例の如く役人視察を止め、切めては、藍綬褒章を受けたるもの位は鄭寧に訪問し、隱者には禮を守り、義人には節を屈し、學校は一城廓として其の主に道を盡し、大いに士風顯揚の爲に盡されたいもので、其外は、學校以外、學制以外に文部大臣の大責任あるとを實地に承知されたいとである。兎角、從來の文部大臣の通弊で、直ぐと學校のみに着目するが病いである。學校は文政の一部分で、而も才子連が精かに注意して斗り居る所ろであるから、大臣は之を放つて置ても少しも心配はないとである。

◎**山縣內閣の運命如何**と云ふ問題に、夜もロク／＼眠らぬ人があるであらふ。味方は之を失はぬ樣に、敵は之を倒すやうに樣々に工夫して居るとならんが、新聞を讀まねば天下は太平なり、其の爭そひに關係せぬものには痛痒も感ぜぬ。左らば國家の爲には、どふなれば善のかと問ふものもあらふが、國家の爲にはドチラになつても大した相違はないので、先づ回向院の相撲が、其道の人を狂氣にする丈と、評判記を讀む人に面白い丈けである。

佛蘭西革命の無意義

（ルーテル改革との比較）

青柳有美

一代の反動、隆んに其波をあげ、自由民權の旨義、一たび志士の唇に唱へられてより、謬りて人心に浸潤し、革命を以て徒に悦ぶべきものと相心得たる今の世は、濫りに史家の迷へ

る筆頭に心醉して、佛蘭西革命を近世歷史の一大段落の如く相思ふに至る。悲しからずとせんや。

されど、こは唯その聲の厳めしきと其色の華々しきとに驚殺せられたる昧者の謬見ならんのみ。夫れ山の貴きは、高きがために非ずして、樹木あるが爲めなり。佛蘭西革命にして、若し、其實なくんば、聲華如何に美はしと雖ども、到底史乘の一大事なりといふに足らざらむ。錄して曰く、山高きが故に貴からず。木あるを以て貴しとすと。禍なる哉、十九世紀の史家は、『民主自由』の酒にくらむ醉漢なり。人を導て溝壑に轉ぜしめずんば、幸なれ。

佛蘭西革命は、假令ば、九段坂の砲火川開きの花火の如きか。觀る者、その爆發の轟聲と其光の華やかなるとに嬉び、しばしば、頭をあげて之を仰ぎ、アレヨ〳〵と喝采すれど、美はしき色と光とは、須臾にして消え、之が影をだにとゞめず、仰ぎし天は、今も昔も相變らざるなり。

佛蘭西革命や、其なすところ誠に仰々しく、硝焰の雨を降らせ、血の洪水を漲らせて、しきりに、王者高族の首を斬り、佳美人の命を絕ち、一世を驚動せしと雖ども、思へば、是れ

一時なり。之を以て、世界の文明に寄與すべき永生ありしといふべからず。たゞ斬れるのみ、たゞ斷頭機に血ぬらせしのみ。故に以爲らく、佛蘭西革命は、其發頭人なるミラボー、ダントン、マラー、ロベスピエールなどの儕輩が、多くの無辜を斬殺して、又自ら遂に殺されたる如く、多くの善良なる制度文物を破壞して、自ら又遂に歷史の墓に葬られたるなりと。我れ、その賜ものの十九世紀文明に殘れるを知るに苦む。されば、之を以て、眼を樂ましめ、耳を驚かしむる一大悲劇(トラジエヂー)なりといふはよし、近世歷史の一大段落たりといふに至りては、斷じて不可なり。

世間の人、概ね、佛蘭西革命を以て、『民主共和』の思想を、近世の文明に傳へたるものなりとなす。されど、我れ誠に其然るを贊し難し。

近來新開國なるもの、起れば、必ず民主共和政を執るの習ひあり。是れ果して、佛蘭西革命に鑑み、其政躰に法るの故乎。何ぞ知らん、その却て北米合衆國を學ぶものたるを。彼等のうちロベスピエールを思ひ、ミラボーを念し、ルーソーを學んで、新共和國の礎を開けるもの、恐らくは、一つだにこれな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

からん。此の如くにして、其特徵と稱せられたる『民主共和』の思想をだに、近世文明に殘さゞりしとせば、果して、其他に如何なることをかなせる。

之れに依りて、新文學生れ、新美術起りしか。將た、文明の新潮流出し乎。

若し文學ありとせば、たゞ僅にルーソー、ウオルテイルありて、そのエミール敎育說と其シヤール十二世論とが、僅に篤志家の文庫に入りて、哀れなる餘影を今日にたもち、其『民約論』と無宗敎論とが、乳臭突飛なる日本國民に囀らるゝが如きのみ。若し又、佛蘭西革命に新美術ありとせば、かの一人の娼婦を飾りたてゝ高御坐に据ゑ、之を『義之神』なりとて、拜み跪けることのあるのみ。

今に至りて、吾人は、佛蘭西革命より、何物をも得るところなし。たゞ其一代の壯觀たりしを歎賞すること、埃及の金字塔を見、希臘の群神堂を觀じたるが如しと言はんか。

是に至れば、かのルーテルが宗敎改革なるものの、佛蘭西革命に勝ること千萬にして、實に近世史の一大段落なりと宣言するも、敢て妨けなきを見る。新文學も新美術も、新文明も、全く之れによりて、相起れるなり。

獨逸の國語が、ルーテルの聖書飜譯によりて、始て能く制定せられ、英吉利文學の骨髓なるウヰクリツフ以下の英譯聖書が、この宗敎改革當然の結果として現はれ出て、遂に獨にありては、ゲーテのフアウストを生み、英にありては、沙翁ミルトン以下の大小詩人を作れるは、誰も知る如く、云ふまでもなく、彼の固くろしき拉典語を避け、不整頓なるローマンス語を棄てゝ、歐洲列國、みな其純國語を得るに至れるは、主として、この宗敎改革が來せる聖書飜譯の賜物なり。

美術の如き、人多く之を言はずと雖とも、我れ亦その然るを見る。聖アンデレ大學の敎授ナイト氏の說によれば、各時代おの〳〵特絕の美術あるものゝ如く、希臘ペリクルスの時代は、是れ彫刻の時代にして、以太利ヴエニス、フロレンスの中世紀は、これ繪畫の時代、近世に至りては當に是れ日耳曼音樂の時代なりと、然るに、近世美術の特徵とも見るべき此日耳曼音樂なるものは、素よりバツハ、ヘーンデル以下の盡瘁によると雖ども、其源は、宗敎改革當然の結果として禮拜勤行讃揚の方法、非常の大變化を來し、新らたなる宗敎觀念を現は

すべき新音樂の出でざるべからざる機運に立ちいたれると、一方にありては、ルーテルが非常の熱心を以て、音樂を奬勵せしとに、是れよらざるべからず。然らば、ベートーフェンが美はしきシムフオニーなど、皆なルーテル改革の賜物なりといふも、敢て不可なけれ。

建築に至りても、又同じく、一時頭をもたげかけたるローマチスク體の、再びまた廢れて、尖形を其特色として詩趣豐なるゴシック體の、近來盛んに行はれ來れるも、全くルーテル改革によれる宗敎思想及禮拜式の變化に基き、先づ敎會堂の建築に變化を生じ、遂に一般の風をなすに至れるものなり。又、今日の小學校及國民普通敎育の礎を置き、強迫敎育の起原を開くに至れるも、またルーテルにして、數へ來れば、枚擧の暇だになし。

特に驚くべきは、近世文明の潮流が、この宗敎改革によりて、一轉化せられたるの跡あることなり。

西羅馬帝國は、早く第五世紀の頃に、北狄蠻人のために亡滅せられ、東羅馬帝國も、又十五世紀に於て、聖ソフ井ヤ會堂に新月旗を建てしむるに至りしと雖ども、思ふに、拉典文明は、之れによりて、全く其跡を歐洲に絕ちしに非ず、依然として全土を流るゝこと昔の如く、新來の蠻人を誘て、其醇を啜らしめんとせるもの丶如し。而して、この時に當てや、羅馬の法王なるものは、是れ實に拉典舊文明の權化なりしなり。此くの如くにして、拉典文明未だ去らず、さればとて、新來の蠻人が持ち込み來れるテユウトン文明も、消え失せず、日々に益々其勢力を扶植しつゝあるを以て、兩者の衝突一たび、相出づべきは、自然の數なり。是に於てか、十一世紀の頃、早く既にグレゴリー七世とヘンリー四世とは、一ト悶着をなせしが、遂に十六世紀の始めに到りて、テユウトン文明は、其傑出の代表者を、快僧ルーテルに得たり。故に、ルーテルの宗敎改革なるものは、たま〳〵事を宗敎問題に構へたりと雖ども、その實拉典人種とテユウトン人種との衝突、否な寧ろ拉典文明とテユウトン文明との衝突にして、宗敎問題といはんよりは、恐らく却て、人種問題文明問題たりしといふを得んか。されば、ルーテルの勝利は、テユウトン文明の勝利にして、法王の敗北は、拉典文明の敗北なり。而して、十九世紀の、實にテユウトン文明の世なるは、辭むべからざる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ことなりとす、然らば、羅馬以後世界文明の潮勢が、全く拉典的のものなりしを一轉して、新に近世のテュウトン文明に趨向せしめしは、是れ全くルーテル宗教改革の賜ものなり。故に以爲らく、ルーテル改革は、世界に新文明を出せりと。ルーテル改革の世界文明に印せるところ、此くの如くに多く、而して、佛蘭西革命の遺物は、此くの如くに、夫れ少し。然らば、せめては、其功績の、佛蘭西一國になりとも、殘るものある乎。凡て劍によりて起つものは、又劍によりて亡ぶ。かの如き殺人不義破壞を勉め、世人をして『恐怖時代』と歌はしめたるまで、震天動地の大狂亂をなして建立せる共和國も、一たび一世大ナポレオンの劍影砲火に遇ふや、忽ちにして、再び昔の帝政に歸れるに非ずや。然り、其帝政は倒れて、又新共和國起れり。されど、ルイ、ナポレオンによりて、又々帝政に歸れるに非ずや。其帝政も倒れて、今や三たび佛蘭西共和國の名ありと雖ども、その根底頗る薄弱にして、先きには、ブーランゼー將軍のことあり、今や又ドレフユー事件ありて、國内頗る動搖し、早晩覆らざるべからざるもの丶如し。佛蘭西革命にして、若し此の如く世界の文明に寄與するところ殆んどあるなく、加之、その本國佛蘭西にさへ、遺すところ全くこれ無かりしとせば、其聲の高く其色の眩きが如く、しかく難有きものならずして、無意味のものノンセンスのものたらんのみ。憐むべきは、之に隨喜感泣する『自由民權』の妄信者なる哉。

我れ、前に、新開の民主共和國は、北米合衆國に法るものなるをいへり。然るに、北米合衆國は、素とこれ英國々民の、ルーテル改革に感激して、清教徒と稱へられたる族の、信教の自由を其祖國に得る能はず、遙に渡航して建設せるところなり。然らば、十九世紀の民主共和主義なるものも、又ルーテル宗教改革の賜ものにして、佛蘭西革命の恩物にあらずといふべきなり。是に於てか、其流せる血は意味なきの血、その破壞は戯れの破壞たりといはざるべからず。故に以爲らく、かの吹聽高き佛蘭西革命は、觀て美はしき花火の如く、たゞ盛なるのみにして、全く無意義のものなりと。

斷頭の血を灑ぐ　革命の波推しわけて
現はれ出しタイタンの　まばゆき光照すさき
「民主自由」の聲いづこ　晩翠『馬前の夢』

女學

嫉妬心の研究

無識庵東根

『凡そ婦人は嫉妬心深き者なり』とは、專ら坊間に行はるゝ說にして、何人も之を怪まさるか如し。夫れ多衆の公言は往々眞理を含むものなり。然れども婦人の嫉妬心を以て、殆んど天性なるが如く思惟し、時所位を通じて一定の狀態なるが如く見做し、女敎論者は熱心に之を戒め、又之れあるを以て罪障多き階級となすに至りては、頗る誤れり。婦人の嫉妬心の消長は、徒らに坊間の俗說を以て推し難きものありと信ず。

抑も、嫉妬心とは何ぞ。曰く、双方の間に於て、相互に發すべき正當の情義を輕んじ、却て第三者に對して、双方の間に行はる如き情義を發起せし時、又發起せしやの掛念ある時に一方に生ずる所の情なり、之を分解すれば競爭心あり怨恨心あり、憤怒心あり、專有權あり、愛着の情あり。斯く種々の要素ありて之を增減せしむるか如し。槪して嫉妬心は、自己より過度に上位にあるものに對して起ることなく、又過度に下位にある者に對しては起らざるものなり。而かも夫婦の關係に於ては、其間に上下貴賤の念を脫するものなれば、上位下位を以て之を論じ難し、苟且にも夫婦たれば、其の互の間には貴賤尊卑の念多少有之と雖も、こは微かに世俗的に存するにて眞情は決して此階級的念慮を以て維持せらるゝに非ざるなり。換言すれば階級的念慮は畢竟社會的の因襲力にして、夫婦の結合上に於ては格段の要素となるものに非ず。

若し夫れ嫉妬心の眞相を解せんとせば、先づ之を歷史的に察し、更らに心理的に究むるを要す、余の見によれば嫉妬心は素と男子に起りたるものにして、文明の進步と共に漸次女子に移りたる者なり。試みに未開野蠻の民族に徵せよ。其妻女の不義に對する刑罰甚だ嚴重なると、男子が婚嫁の節、嫁の處女たるを要求する念慮の盛なると、妻は身を終るまでは勿論其死後も夫に屬すとなすの信仰あると。寡婦を殺の俗、及寡婦の再嫁を禁すると、又假令再嫁するも速かに爲すを禁すると。其他、夫に對する義務の酷なる等は、社會學者の一樣に認むる所にして、未開時代に於ては何れの民族にも行はれたる所と

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

斷じて可なり。而して這般の消息は男子の嫉妬心の甚だ强かりしとを證するものに非るなし、吾人は未開時代の習俗を究めて、未だ女子の嫉妬心の存在を認むると難きに反して、嫉妬は殆んど全く男子の固有性なるが如き狀を見ずんばあらず蓋し未開蒙昧の世は、腕力上の優勝劣敗のみ行はるゝが爲めに、婦人は母系、母親權の時代に於て社會に認められし外、其以前及び其後父親權に移れる當時は、勢力最も微弱のものなれば嫉妬するの餘裕なかりしなり。而して男子は女子を一種の用具となし、之を專有して自由に左右せんと欲するの念强く、第三者と關係を生するとは最も苦痛に感じたるなり。又他方に於ては互の道德進まざりしが故に男子の大嫉妬なかりせば、却て亂雜を增加したりしならん。然り當時に於ては必要の者たりしなり。其の何れたるを問はず、未開時代は男子のみ嫉妬心强く、占有の狀たりしとは疑ふべからず。

然るに坊間說を爲して怪まざるに至れる『婦人は嫉妬心深きものなり』とは、何時頃より始まれるにや、未だ之を審にせずと雖も、余は婦人に嫉妬心の生したるは、之れ社會進步の一段を經たるものにして、(歷史的に云へば) 婦人の權力の稍成長したる時代にありと信ずる者なり。始めは男子の壓制の下に在りて一顰一笑皆其嫉妬を燃すに過ぎざりしが、愛情發達して家庭に於ける婦人の權力漸く加はり、此に夫と雖も徒らに第三者と關係するの不道理なると、不利益なると、惡となると、等を認め、之を怨み之を憤り之を誹り之を戒むるの情生したるなり、此に於て乎、嫉妬の情始て婦人に發芽したりと云ふべし。之れ女子の世に認められたる證なり。

此情一旦婦人社會に發芽するや、文明は着々進みたり。故に古代未開の時に行はれたる如き、女子を苦惱せしむる種々の惡習は漸次減少せり、則ち花嫁の處女たるを要求する情ありとするも公然儀式的に之を證明する如きとなく、夫の死後に至るまで其の附屬物なるが如き念は減少し、寡婦は再婚するも格段の罪惡とせず、貞操とは必ずしも古代風の法尼師となるに非ず、離緣も夫々の條件ありて、妻よりも請求するとを得る如き、例令尼法の制定なきも、一般に男子が專ら女子のみを嫉妬したる俗習は、年々減少し去りたるは事實なり。此事實は總躰に男子の自然的嫉妬心の減少せるを意味するものにして、此進步には女子の部面に嫉妬心の發生せると與りて

力あり、換言すれば女子進歩したるが故に、女子に關する惡習除去されたるなり、其進歩の中には嫉妬心の發達をも含むなり。若し御無理御尤主義にして、古代の如く全然壓力下にあらんか、如何ぞ進歩的愛情の結合あらん、依然として男子のみ嫉妬心を燃やせしや必せり。

以上は歷史的に見たる所なるが、更らに抽象して、心理的、社會的に見ざるべからず。

概して言へば嫉妬心は、趣味好尙の狹きもの、快樂を得る方法の少なきもの、執念深き性質のもの、懷疑心の盛なるもの、邪推深きもの、心胸狹隘なるもの、競爭心あるもの、友人の少なきもの、等に發し易し。如何なる人間と雖も多少の嫉妬なきはなく、(哺乳動物總體にあるが如し、)常に人情の一部を占むる者なれば、多少の度こそあれ、毫末も之を有せざるものあらじ、之れなきは人間以上か人間以下のものなりとす。唯修練によりて之を他方に向け、善良の道に注ぐとを得るのみ。則ち變形せしむるとを得るのみなり。

今、歷史的發達の順序論を別にして、近世の嫉妬を見るに、男子に少なくして女子に多く、田舍に多くして都會に少なく農夫に強くして商工者に弱く、弱國に深くして强國に淺きが如し。男子、都會、商工者、强國等の嫉妬は變形的となりて、自然的に非ず、古風の嫉妬減少して變形の嫉妬強くなれりと云ふべき也、女子、田舍、農夫、弱國等は依然自然の嫉妬心を有し、未だ變形すると少なきなり。故を以て坊間『婦人は嫉妬深きものなり』となすのみ。是等の嫉妬心强きものと弱きもの、變形せるものと變形せざるものとの別は、社會的の原因與りて力あり、則ち前者は進歩的にして開發的なり、境遇の變化劇しく、鬱散の方便數多あり、之に反して後者は趣味狹少にして變化せる境遇に居ると少なく、保守的にして心胸狹隘なり、之れ一は強く他は弱き所以、一は變形的に強く他は自然的に強き所以、一は表面上、世の所謂嫉妬弱きか如く見え他は表面上、強く見ゆる次第なり。

女子は戶內生活を爲す實に女と猫と烟出しとは決して家を離れざるものなり、且つ敎育の度低く、其戀愛を以て生命となし、其夫を以て本尊となし、保守性にして移り難き質あり、此性情を有する物の嫉妬深きは止むを得ざる者也、人苟も嫉妬と云へば一種の罪惡の如く見做し、缺點の甚だしきもの

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

となすも前述せる如く嫉妬は双方間に盡すべき情義を怠りて却て第三者に盡すが如き行爲の苦痛に感ぜられ、之を等閑に附せば双方の關係を破るの基となるを信ずるの念に出づるが故に婦人に嫉妬心深しといふは、之れ男子に不品行者多しと云ふに同じ、嫉妬は敢て惡德と稱するに足らず。又男子は何故に所謂嫉妬の念薄きに至れる乎、之れ遊樂の方便多く、氣散の術に富み、友人の快談、種々の娛樂一々以て氣散の種となすべく、戶外に出で氣隨の行爲を爲すの自由を有するが爲めなり、自然的嫉妬の情の缺乏する知るべきなり。

田舍には放火犯あり、其由來を問へば或る個人に對する報怨嫉妬より來るもの、四邊寂として物淋しく、鬱氣を散ずるの術に乏し、娛樂の方便亦少なし、爲めに心性狹隘となり、些少の事柄をも心に酩じて執念すると深きに至る、都會は觸興感境、心に蟠る所を散ぜしむると多し、多少の固執は外界の慰籍によりて消滅し易く、氣散の術亦多し、故に執念深きもの報怨嫉妬の情の强きものも漸次減少するに至る、農夫は田舍に多く、商工は都會に多し、前者は强く、後者は弱し。斯の如く見來れば、嫉妬なるものは、歷史的に論ずれば、素と男子の占有に屬せるもの丶、女子に移り、斯に社會一般の進步を爲したるなり、今日女子に嫉妬深しといふも、多分は社會の罪にして女子の天性と云ふと能はず、嫉妬の情は男女を問はず、全人類多少共存するもの、唯社會的原因の種々なるものありて、近世の嫉妬は女子にのみ深きが如く、感ぜらる丶のみなり。其女子に深き理由は、則ち田舍、農夫、弱國等に深きが如きものとす、然るに殆んど天性固有に深きものの如く言從するば未だ其眞を得ざるものと云ふべし。

古來我女敎を立つるものは、婦人を蔑視して罪障深きものとなし、或は三界に家なし夫の家を家とすと云ひ、三の從ありて五障の罪殊に深しと云ひ、理をまげて夫に從へといふの類則ち儒敎、佛敎の說を始め東洋全般の習俗を以て眞理となし之を以て規矩とし標準と爲せり。是れ其當時已に婦人の一種の勢力あるを認めたる證にして、唯之を抑制すれば家內安全なりと信ぜしなり、如今、學術開け、方便說、便宜說の取るに足らざるとを知るや、女敎論又一變し去らんとす。此時に當り、最も打破すべき俗說は、女今川、女實語敎、女大學等を始め其他に含まれたる女子の嫉妬深きと、罪深きと、等を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天性固有の性質、運命及法則なるが如く断定し去りたる一條也。之れ當時の家族制の維持上の必要と一種の謬見の固定したるに過ぎす、今日社會の學術進歩して、婦人の心理研究漸く盛ならんとするの際、余は殊に之を記して、世の女教論者の一考を煩はさんと欲するなり。女子と小人とを養ひ難しとせるは、畢竟教育の道を得ざりしものにして、女學の不振に依らずんはあらす。

近世	半開時代	未開蒙昧時代
男、嫉妬心變形的に深し、	大に深し	最も强烈なり
女、嫉妬心、自然的に深し、	稍深し	殆んとなし

右の如くなれば、心理的に分拆すると同時に歴史的に見るの必要あり、文明の進歩は自然的の嫉妬を轉じて變形となし、名譽、權勢、立身上の爲めに隠然たる害他心として表るゝなり、外交の掛引、攻守同盟何れか嫉妬心の變形に非るなき。毫末の嫉妬なきは愛情なきなり、嫉妬は専有の權を實在せしむるに力ある情なり、唯其の亂に及ぶを戒むるのみ。過度に陥り亂に及ぶもの丶害ある萬事萬物皆然り、豈に一の嫉妬のみならんや、但し余は此辨を爲して婦人の嫉妬心の増長を望むものに非ず、之を變形し誘導して、他の方面に利用すべしと云ふのみ。蓋し自然的嫉妬は凡て未開の證蹟を示すものに過ぎざれは也。

妻の不平

名もなき賤の女

前の號にものし給へる或る方の不平の述懐を讀み侍りて思ふ事の斯くも違ふものかと感ずるまに〳〵書いつけたるものを左に奉つる。

◎妾ごときものを顧り給へるすら忝けなしと思ひけり、一つ家に住むとを許されて、朝夕御傍に侍べらんとは必らずしも期せざりしに、不思議の縁にて夫もかないたれは、何すとて不束なる妾の思ふごとならずなどとて不平のあるべきやは。たゞ〳〵深き御恩を測りかね、高き御志に副ひまつるとの難き、我身の愚かしきも程こそあれど、つらき悲しき不平のはべるなり。

◎人並すぐれたる器量をもち、尋常ならぬ學問にも精はしふして、良人に恥ぢぬ内助をとげ、相列んで世をすぐし、應接

談話にも對等の御もてなしある方々を見るにつけ、人の生れ付にもよるか、育ての足らぬ故にやよる、妾ごときは所詮及びも着ぬものと思ふにつけて、少こしくは不足の心地の候。

◎御やさしきにつけ、打あけて語らひ給ふにつけ、様々に問はせ給ふにつけ、思ふことの百分一も答えまつることの出來ずして、顔のみ赤らみ、胸のみどよめきて、后に口惜しきことの多し。憶面なく何事も語り給ふ婦人もあるものを、妾は何とて斯く世なれぬにや。左りとて、明らかに、答へまつらざりしを、如何に見そなわしけん。御誠と信じ、御心切を謝する心計りは人に劣らぬよしの通ずるものにや。吾身ながら辛氣くさきほどの不平あり。

◎妹は當世風に捗々しくもてなして、人中に出でゝ後れを取るものならず。同じ腹に生れて、妾わと何とて斯くも違ふものかと、怪しまるゝほどに大胆なり。之を伴なひて交際會などに出で給ふ義弟の君は、さこそ心地よく思ひ給ふらんが、我が良人は之に比べてさぞや妾を歯がゆく思し給ふらん。斯く言ふべかりし、斯く爲す可かりしと、後にて思ふほどの頓智が當座に起らさりしこそ不平なれ。

◎姑さま、舅さま、義兄さま、義妹さまも、同じきやうなる御心地にて、さぞ〳〵足らわぬものと思召し給ふべし。御情け深くして、何事にも妾をかばひ給ふ良人は、方々に對して如何に御苦しく感じ給ふらん。我身の足らざるこそ不平なれ。

◎外に出でましては七人の敵ありと諺にも言ふ御事業に忙わしく、内に歸らせ給ふても妾の爲すべき事に迄で御指圖を煩わしまつる。妻は内助の役を負ひて、良人の事業に半ばの助けを獻ぐるものぞなど、雑誌にても讀み、學校にても聞きつれど、中々の事なり。家の内にて、妾の爲すこと丈けすら、御手數をかけまつること、返々も殘念にて此の不平いかにせん。

◎過ぎし日の御話に、何某の夫人が口かしましく良人の外出に關係すと仰せられて、常になく御顔のしかみて見えられしは、妾にも省りみよとの御心か、妾にもかゝることのありとてか、嗚呼、苦しきことよ。

◎思ひ廻せば、妾こそ幸あるものなれ。萬人に重んぜられ、温厚信義の名を得給へる吾良人にそひ奉ることの出來べき身分かは。運と云ひ、緣とは申し乍ら、何によりてぞ、斯の幸は

ひは得たる。されど、妾に此の僥倖あるほどに、吾良人の御不運なるべし。悔ひさせ給ふとはなきや。恨み給ふとはなきや。斯程に御やさしき御心には、終生妾を棄て給ふなどの事毛頭だになきは火よりも明らかなれど、其の恩に狃れ、其の仕合せを妄りにするは冥加にかなへりや。さりとて、自から退ぞかんは死するよりも苦し。せめて吾良人の御心の底の承りたきかな。聞かで既に明白なるよふにてはあれど、尚ほ一應は承りたき心地ぞする。此の願ひ鬱して散らしがたし、此の心を不平と申さんは恐れあれど。さりとて不平と同じほどに感じまつることこそ心得ね。

◎外に不平と云ふとのなかりし身には、心に鬱して去りがたく、忘れんとして忘れがたき、平らかならぬ物思ひをこそ、不平とは云わめ。良人に申し上げたき山々の心の中、盡しても盡されぬほどに忝けなき感謝の心の中、耻かわしきとながら初めて會ひまいらせし折の心の中、初めて嫁ぎまつりし折の心の中、其后日として夜として時として今として一刻だに去りがたきうれしき樂しき心の中の心の中、出で行き給ひしあと信と乍らのさびしき心の中、一時だに御傍を離れし折の心の中、時々の不束を温和やかに心づけ給ひし折の有がたき心の中、此の后一生、一生の后の后の世まで如何ほど迄でに思ひまつり慕ひまつるかの心の中、此の心の中は、海の水をかきほし、濱の砂を算へ盡すほどに、悉皆聞こえ申して、死すとも遺憾なきほどに告けまつらぬとの如何に〳〵心中の不平なるかは、なか〳〵に書くとも〳〵盡きがたし。

近松女氣質

櫻井鷗村

（其五）かる〳〵三度の嫁入に　（下）

未來を急ぐ二世の緣

宵庚申のお千代

更に父親に知られて、又去られて戻つたな。子に運ぶ親の心。座ながら千里万里も行く。況てや一つ家の內、寢ても寢られず、最前より、何事も皆聞きしが。そも我ながら、氣も強く、義理にも引かれ、おのれ重ねて去られたらば、顔も見るまじ、物云ふまじとの我もありしが、六十に足踏ん込んでは、年ばかり

よるでなく、月もより日もより、病にはからまるゝ、身の衰ふるほど、案じらるゝは、子の身の上、三度はおろか、百度千度去られても、去らるゝに定まりし、前世の約束と思ひあきらむれば、悔みもせぬ憎うもない。笑ふ人は笑ひもせよ。譏らばそしれ、指もさせ、子の不便さにはかへぬぞ。
半兵衛奴は遠州へうせて留守の内とな。其留主合點、万一うせたりとも、物云ふな顔も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入りさせる。苦に持つて煩ふな。
と有難き親の慈悲に、安堵はすれど、世の譏は、それを如何にかはせん。
お千代、人生の悲惨に苦しめられて、心自然に冷やかなる節あり、されば、自から、半兵衛へ運ぶの愛情には、事足らぬ處ありけん。故に姑去りに逢ひて、里戻りする途中にては、夫のなつかしさよりも、恨めしさの方、多く心を支配したりけん。こはさもあるべき道理にして、世上の冷淡なる道徳家よ、酷薄なる繩墨を以て、お千代を律する勿れ、佳人、長恨を抱いて、人生の悲惨に泣くは、誰か、此女性の如くならざらん。酷薄なる繩墨は、即ち薄命の佳人をして、死地に急がしむるものなり。口善悪なき村人も、これ亦、冷淡なる道徳家の流なり。
然るに半兵衛は、何處までも、義理難き好漢なれば、留守中の、變事は、知らずして、遠州よりの歸路、嫁親の機嫌見舞に立ち寄れば、不圖らずも、妻お千代在り、姉の様子いといぶかしく、さるに又、親平右衛門が、病中の體、娘に、平家物語祇王の段を讀ませて、半兵衛を清盛に比し、祇王に似て『五月雨ほどに戀ひ慕はれて、今は秋田の落し水』なる、お千代を憐れみ、
去年婿入せし折柄不重寶な娘を進上致した。氣に入らぬ事あらば、打ち毆き、縛り括つても直させ、末々までも見捨てず、添ふて下されかし。此度共に三度の嫁入。在所は一所どころにて、又歸つては、平右衛門、二度人中へ頬が出されぬ。娘は氣に入らずとも、我を不便と面倒見て、必らず去つて給はるな。オヽ去るまい〳〵。御臨終の折りからは前輿は平六殿。後輿は此半兵衛。眞實の子を持つたと思し召せ。今こそ町人八百屋の半兵衛。元は遠州濱松にて、

山脇三左衛門が悴。武士冥利商ひ冥利。千代は去らぬ氣遣ひするな。アヽ忝ないと手を束ね、地頭代官の其外に、一生下げぬ、頭を下げし互の契約。物忘れする老いの身にも、其時の嬉しさは、骨身に染みて忘れぬもの。若い形して、忘れしか、忘れぬ證據、其身は實父の吊ひにかこつけ、遠州へ出かけし、其跡で、姑に追ひ出させ、養子の親に我罪を塗りつける不孝者。義理も法も知つた奴か。彼が何の武士の果。鰹節の削り屑、人で無しめに縁組んで、あたら娘を捨てた。ふくに吟味もせなんだかと、死んだ母が彼世から、恨み召されう、口惜しい、

と、切齒憤慨するを立聞して、半兵衛、はじめて狀を知つて、我身の知らぬ事とて、大に驚き、而も、平素己が、抱持する、義理の二字と、武士の魂とを、爲に輕蔑せられて、情愛の割裂よりも、これが爲に意氣熱烈となり、かくの如くに罵詈せられても、言譯なさの言譯に、自害せんとして、

エヽ情ない女房、假令一言一宿の、つき合にも、人の心は知るもの。况して足かけ二年の馴染。子までなしたる夫の心、知つても言ひ譯して呉れぬかい。親父様の御立腹。申し開くは、知つたれども、我罪を、養ひ親に塗り付くる、不孝者との一言からは、ゆめ〳〵存ぜぬ我等。去りは致さぬと申し分くるほど、不孝の上塗り。親父様につがひし詞、違へぬ武士の性根を見する、見て疑ひをはれ給へ、

と、いふに夫の眞情、全く明白となり、お千代が胸中には今迄ありし隔ての薄雲、忽ち破れて、

なう戀しや、こな様に恨みは無い、

と、恨去りて、眞の愛念一圖に、夫を思ひて、自害を救はんとするに急也。半兵衛は、嫁親が義理の說法に、自害もならず、過を知て、これより直にお千代を同道して歸らんとして、

エイやつぱり私を女房に持つて下さんすか、

と驚喜し、

オヽ假令死んでも身體も戻さぬ。ぢん未來まで女夫〳〵

と、斷乎たる契約に、お千代の情念は、殆に全然万斤の鐵鎖に縛せられて、半兵衛の胸間に繋がれ、愛の力を曉りて、無邪氣なる小兒の親に依賴するが如くに、前途に何等の悲境あるべきか、それ等は思ふるに遑なく、たゞ夫に倚りて、淚を拭ふて、イソ〳〵と歸宅を急ぐ、そのしどなさ、可憐さ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋しこれ、愛の全きを得たる女子は、誰しも、皆如斯ならざるはなけん。

士は己を知るもの丶爲に死し、女は、己を愛するもの丶爲に命を惜まず。お千代、三度目の嫁入によつて、始めて、己を愛する半兵衛に添ひ、其愛を悉く悟りたる刹那に、夫婦の契緣は、死生に關せざるまでに熟したり。

親父平右衛門は義理一片の人間、自己の名聞、子の名聞に心を凝らして、『姉なう重ねて戻らぬため、祝ふて内で門火たけ』。との堅意地は、一度目、二度目の里戻りの際に、お千代をして苦に苦を重ねしめ、鬱狂を増さしめ、三度目の嫁入にも、法廷よりする死刑の宣告の如くに、この堅意地の理屈を說き聞かせたるによりて、お千代は、深淵に臨むの念にて歸ぎたりと雖も、今や生命の歸を得て、重ねて戻るとなしと、心、爰に安く、樂境に入るの情あり。

既に家に歸るや、歸途のお千代の心の樂しみや、那計なりけん、思へば可憐至極なり。然るに、姑の鬼婆、無情にも、親の暴威にて、半兵衛にお千代を去るべしと強ひ、去らずんば、義理ある親に背き、去れば、嫁親との契約に違ふ。いづれか、義理を、破らざるはなく、故に、道を情に歸して、心と心、相許すと深き、夫婦、同じ枕に此世の命を絶ちて、二世のさはりなき緣と急ぎつ丶、我家を去つて、『サア鰐の口を脫れた。サアおちや。』とお千代を伴ひ、

待つて下さんせ、生中、一度戻つて、此方樣の口から退くぞ。去るぞと云はれては未來までの氣掛り、此門口で唯一言去らぬと云ふて下さんせ。

と、可愛の妻の哀求、何とて、此二人は別離すべき。

水の中、火の中でも、先の世までも、此方樣と、夫婦になつて居る所を見立てゝ、死んで下さんせ。

と妻の心はこれなり。夫の心は即ち、

過分な、此書置にも書く通り、養子に成つて十六年此方、十方旦那の機嫌を取り、暇ある日には町中を振り賣りし、元は僅の八百屋店。今では人に少々の、金貸すやうに儲け溜めても、辛い目ばかりに、日を半日、心を伸す事もなく、死なうとせしも以上五度。恨みある中にも、和女に緣組み切めての憂さを晴らせしに、それさへ、添ゝぬやうになり、死ぬる身にまで成り下る、

との赤心を展いては、お千代の望みは、たゞ情死に在り、何んぞ、半兵衛が因果の、己にまでふるまひたるを喞たんや。妻を去らず、火宅を去つて、二人の一命、刄の露と消えて、雙魂永く、樂土に安着す。

宵庚申の一曲、これを讀めば、悲哀、自ら胸中に蟠り、義理人情の衝突、冷淡なる道德、離婚の苦痛、不快なる家庭等、人生の慘狀を觀じ、思ひ內にありて、筆紙之を盡す能はず、悲凹の文字に長歎し、世にも潔き、半兵衛、お千代の情懐を、忖度して、哀痛を寄す。

隨感

○情花胡蝶を呼ぶ

女の粧ほふは其の性なり、必らずしも媚て愛を惹んとするの野心にのみ出るものかは。たとひ、人の見ざる山の奥に住ふとも、女は倘ほ幾分の化粧すらん。其の美を好むの心、これを促がせばなり。男子、勇を慕ひ、女子、美を慕ふ。われ本來之を慕はんとき、何んぞ必らずしも人の見ると見ざるとを問はんや。こゝをもて、世人の一概に化粧を卑しみ、總べて一種の虚飾に過ぎざるやうに言ひ做すと、甚はだ當らず。清教の徒、この消息を無みし、社會改革の士、むげに此の秘密を蔑がしろにするは、寧ろ惜しからずや。左り乍ら、純然たる此の趣意によるにあらで、別に一種、他の目耳を引んとするの心より飾るとは固より之あり。滔々たる化粧の目的、十中の九は即はちこれ也、然れど亦た此の情を卑しまんとすると固より當らず。牝牡相擇み、雌雄相引く、落花流水の照映は素と天地の自然にあらずや。此の心、つゝしみを生じ、此の思、はづかしみを起し、三五、月影に顧りみ、二八、花下にわぶ。心の色、衣に染まり、情火、裳に飜がへる。粧ほひは之れ一生の運命、まさに其の緣を結ばんとするの機會にあらずや。左れば、われは其の好みを下しとせずして、其趣むきの淸からんとをすゝめ、只化粧の品格に高尙の要求あらんとを望まんとす。君等、試ろみに初夏爛熳の花の下に立ち、蝶蜂の飛ちがひて樣々の色に引かるゝ痴態に看よ。此花に迷ふものあり、彼花に醉ふものあり、紅を望みて飛びゆくもの、途に紫のゆかりを思はず、黃を慕ひて奔らんもの、淸

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

白の純なるを顧みず。花の形、花の姿、花の色、花のよそほひ、皆な各樣の媒を招き、以て濫交雜婚の輕々しきを斥ぞく。左れば、君よ、君が粧ほひは、其色に相應はしき好みを引かん。其の粧ほひの氣高きときは、氣高き人の好みを引き、其の粧ほひの下卑たるときは、下卑たる人の好みを引ん。粋は粋を招き、艶は艶を呼ぶ。其色、浮薄、其姿、輕淺にして、以て重厚眞面目の趣味に適はんとすとも、得んや。左らば、其の友とする所を見て、其の氣を知るものは、其の飾る所を見て、其の求めを知り、其の求むる所を見て、其終生の緣しを察せんと、豈に難しとせんや。故に告ぐ、多恨少緣の女、君等、其の粧ほひの品を下して、其の顧客の高からんとを欲すとも得じ。泥土を叩いて、旻天に反響を求むるとき、細虫は先づ草陰に其愚を笑はんとす。

○心霧面上にかゝる

人の着る衣裳のうち、最上のものは風采なり。身につくる粧ほひのうち、最善のものは姿なり。風采は、靈の姿、姿は、心の風采にして、無形沒象の幻、髣髴として四肢五體の邊りに出現す。乃はち是れ心情の反映、氣品の照應なるが故に、人決して摸倣しがたく、互ひに交換するを得ず、只但だ身内に蓄積涵養する所のものありて、識らず他日其の氣韻を發現せしむべきのみ。左れば、同一の人、其の心思の狀態に隨がひて、風姿相貌を變化すると宛がら別人の如し。未だ學びざるときと、深く學びたるときと、未だ修めざる時と、密に修めたるときと、姿貌全たく別なり。君見ずや山水の邊、霞あり霧あるとを。山、大を變ぜず、水、長を易へず、野、廣を移さず、同一の樹木、同一の流、同一の草、豈に變易あらんや。而して一旦霞霧の出沒雜合するや、山色水態忽然として變ずるにあらずや。相貌風姿の忽ちにして改たまる亦夫れ斯の如きか。心裡雲起り、霧立ち、蒸々として精氣發し來れば、耳目鼻口、手足軀身、自づからに態樣を變ず。これ豈に、無形、有形を覆ふて、一種の幻影をつくるものか。左らば、君よ、心に養なひて、身に發表し、自修の姿をもて、遺傳の形を消す、生來の醜も之を改良する難きにあらず、況してや天稟の美に增加するとをや。憂ふる勿れ、薄緣の少女、心姿、學によりて得べく、精采、德によりて成らん。もし汝が典雅

楚々の情、心裡涙深き所に鬱積せば、花影春色に映して、時と共もに煥發することなからんや。眞士、此の姿を見て、衣の粧を見ず。心韻の琴ひく所に聞きて、口頭の音が聞かず。淺々たる佳人、粉脂紅白の上に媚を呈するとも豈に其の敬慕を惹くに足らんや。

○天上の鳥、野の百合花

天上の鳥、野の百合花を見よ、蒔くことをせず、刈ることをせず、紡ぐことをせず、織ることをせず、然れど、天の父は之を育なひ給へり』と。眞とに是れ人生實際の秘義、渡世絶大の敎訓にあらずや。彼の一知半解の徒輩、僅かに人事に經歴して、忽まち處世難を感じ、先聖古哲の遺訓を迂なりとして、道士仙逸の述懷を笑ふ。乃はち是れ其の經歴の淺薄なる所以の證なり。念ひ見よ、先哲の遺訓、何の故に万古に遺るや。人もし其の所説の實際世間に合はざることを認めなば、夙に一代にして早く忘却せられんと、彼の片々たる數多の小文學と同一運命の歸極に入らん筈ならずや。然るに、人若うして其の覇氣なきを嫌ひ、壯んにして其の無爲なるを好まず、大抵、世窮に苦心することなし、天無用の勞苦を爲さずして自から苦しむ

事閲歴の半途に至る迄で皆な之を輕んずることを爲して、而して後ち驟然として一覺し、聖人の實は通人にして、仙士の眞は粹者たる所以の事實に感悟し、空漠にして迂遠なりとし見たる敎訓の極めて大俗なることを承知するもの、一代の終に於て之れあり、一生の末に於て之れあり。先覺、斯の如くして後覺に傳へ、以て彼の經典をして萬古の記臆に活かしむ。其の能く斯の如き生存を爲す所以のもの、乃はち是れ實際世間、人情極致の上に適種たるの優勝を得たるが爲めならずや。されば聞け、蒔くことをせず刈ることをせずして能く食なはれ、紡ぐことをせず織ることをせずして能く包まれ、徒らに明日の事に勞せずして、一日の苦勞、一日にて足れりと訓するもの、眞に人間渡世の秘訣にあらずや。當代の人、やゝもすれば則はち曰く、職業を得る難し、身を立つる尤とも難しと。嗚呼、悲しい哉。マルタよ、マルタよ、汝、撰擇を誤まれり。多くの事によりて心勞れせり、無くてならぬもの、唯一たるを知らずや。汝、職業を求むることを知りて、善を爲すことを知らず、自己の爲に衣食を求むることを爲して、人の衣食の爲に力むることをせず。人もし自己の爲に苦心せば、世は彼れの

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

爲に苦心するヿなし。天無用の勞苦を爲さず。自から苦しむものゝ爲めには其の苦しむに任せ、之が爲めに他をして勞せしむるを許さず。見よ、力なきヿ、孩子の如きはなし、智なきヿ白痴の如きはなし、親なきヿ孤兒の如きはなし、故に天下之が爲めに周旋拮据するにあらずや。汝、先づ自己の爲に衣食を求む、故に世は之を顧みるヿを忘るゝのみ。嗚呼、汝、五尺の身軀を提さげ、健全の心意を抱き、其の一生を擧げて、自己の衣食の爲に勞せんとするに了るか。汝一と度び心志を此の事に勞するに始めば、終生遂に其羈絆より脱する能はず。何んぞ猛然として先づ衣食を天に仰ぎ、餓渇を天に任せ、其の一心を獻じて、人と邦家との善の爲に與へざるや。汝もし眼前手邊に於て爲すべき如何なる事にも勞を惜しまずば、人豈に其の職務の乏しきヿを憂へんや。庖厨に行けば、お三權助の爲に助力するヿあり、庭園に出れば、耕人農夫の爲に助力するヿあり、途上幼な兒のまろぶものあり、鼻緒の斷れたるものあり、人世泣くもの多くあり、乞ふもの多くあり。汝何んぞ力むべき職務の乏しきヿ云ふや。蓋し、汝は、職務に高下の分ちを置き、自己の品格を豫定し、我は斯の如きヿを爲すものにあらす、我が天職は若々の事なりなど自から計る所のあればならん。これ至大の誤謬にして、我慾の希望なり、此般の人、高尙の理を辯じて自己の慾をかくす。識見もヿ惑へり、人事の眞德を知るものにあらず。豈に大事を托するに堪へんや。大凡そ小事を小事とするものは、大事を托すべからず。自己の品格を自識して、職務に貴賤を論ろふものの如き、未だ道に得ざるの人のみ。彼、先づ此の誤謬あり、故に天之を苦しめて其の職業の得がたきに失望せしめ、困々焉として遂に自から感悟するヿを促がす、而して何ぞ覺醒せざる寧ろ悲しからずや。左れば聞け、汝先づ自から職務貴賤の分別を廢し、自己の衣食に勞心するヿを休め、眼前眼下、何事にても爲し得べき善事に盡さまく決しなば、今日直ちに其の職務あり、而して此の職務、衣食の伴なふを見ん。此に至つて人の信任あり、世の重用あり、自から高めずして世之を高め、自から薦めずして世之を引く。播くヿをせず紡ぐヿをせずして、衣食一世に足らん。乃はち是れ救主、人に敎へ、人の煩惱を解き、以て處世平安の秘義を訓する所以の消息にあらずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

いかつち物語（一）

久保ゐ之吉

「神々の尚世にありて人の手をとり導き給ひし折、この世はまとに美はしかりき。詩人の理想にあらむ世界は現實の世界なりき。木にも涙あり、石にもいのちありき。ありとあるもの皆靈ありて、非情のものとては無かりき。山には山つみの神あり。海にはわたつみの神あり。鷄鳴曉をつぐれば日の神は駟馬に鞭ち黄金の車を走らせ東の空より西の海へすゝませ給ひき。あはれ、いつの頃よりか。生命も無き火の球の回轉する事とはなりしぞ。霧はれ渡りて神々はかくれ給ひぬ。我々は神々の手綱よりはなれて獨り立つべくなりぬ。あはれ、神々は世界の光澤をも以て、世界の命をもちてかへり給ひぬ。殘るものは唯旒しき文字の上のおもかげのみ。あはれ賤の女の手にて動かさるゝ紡績の如く永久の回轉を繰りかへすのみよ。」

とシルレルが嘆げきしも理なり。何れの國の神代史を見ても、神人同棲の時代ありて、神は人の世に下りて、人の手をとり、人は神の懐にその身を寄せたりき。神と人とは明なる階級を別ち乍ら相交りき。言を換ふれば、神々は皆生命ありて人の如く動きたりし也。されば風の神は大なる風呂敷をもちてその中より風をまき行きしもの也き。雷の神は雷鼓を打ちて火花を散らし黒雲にのりてかけめぐりけり。泣く兒をダマスに臍をとらるといふ事を見ればいつの世にか臍取に下りませる事もありけむ。

吾國の神代の卷を見れば、伊ザナキの尊、その「いろと」則ちイザナミの尊を今一度見まさんと、喪屋の中に入りませば、イザナミ尊猶生ける時の如く出で迎へ、共に語る。さてイザナミ尊の曰く、『吾せの尊、請ふ、吾れをな見ましそ』といひをはりて見えず。時にくらし。イザナキ尊則ち一ッ火をともして見そなはす。イザナミ尊はれふとり、上に八種の雷あり。尊、驚きて逃げかへり給ふ。是時、雷ども皆たちて

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

追ひ來る、時に道の邊りに大なる桃の樹あり。尊、その樹の下にかくれてその實をとり雷に擲つ。雷ども皆退きぬ。之れ用桃避鬼事のおこり也と。これは日本記にある事也。雷鳴の時、女等の線香を立つるを見れば桃の外に線香も雷の嫌ものと見ゆ。されど、これは物に見えぬ事也。尙、古事記の神代の卷を見れば、これとやゝ異にして八種の雷の名をさへ擧けたり。即ち

『故刺左ノ御美豆良、湯津津間櫛之男柱一箇取闕而、燭一火入見之時ニ、宇士多加禮斗呂呂岐弖、於頭者大雷居、於胸者火雷居、於腹者、黑雷居、於陰者、折雷居、於左手者、若雷居、於右手者、土雷居、於左足者、鳴雷居、於右足者、伏雷居、並八種雷成居』

とありて八種の雷神ありしものと見ゆ、その後は他の雷みえず唯左の定に居りきてふ鳴雷のみ世にのこりけらし。

その後、人皇十七代、雄畧天皇の御代に少子部連螺蠃をめして詔ふには『朕、三諸岳の神の形を見むと欲す。汝の膂力は人に過ぎたり自行捉來』と螺『誠に往きてこれを捉へむ』とこたふ。乃ち三諸岳にのぼりて大蛇を捉取り天皇に示し奉る。天皇齋戒し給はざりければ。其雷虺々、目精赫々。天皇畏れ給ひ、蔽目不見。却入殿中。岳に放たしめ、改めて名を給ひ、「雷岳」と爲す。といふ事日本記に見ゆ。此山は持統天皇の御宇柿本人麿が供奉して御遊ありしところにて人丸のその時聞えあけし歌に

皇者、神二四座者、天雲之雷の上に、廬爲流鴨。

此山は今も大和國高市郡飛鳥村大字雷村にある名蹟也。雷を捉へる事は日本靈異記といふ本に委しくあり。『その時、栖輕は、緋の鬘を頭にいたゝき、赤き幡のつきたる桙をとり、汗馬に鞭ちて、雷鳴をおひたり。大虚を睥睨して「勅詔也」と絶叫せしかども、轟々として猶かけりたり』等あり。叱咤、追行きて遂に落ちたるところは此丘なりといふ、天皇後に柱を立て「取雷栖輕之墓」と標し給へりしを後落雷ありその柱をさくだけり。更に墓標を立てゝ「生之死捕雷栖輕之墓」と記したりとの事迄あり。

尙その書の中には敏達天皇の御代一農夫あり雷の喜をえて强力の子を生みたりとの奇談もあり。されば、此頃迄は、をりく雷神此世に下りて、人に交り給へりしものと見ゆ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

戀(?)の魔歌

有美

○悶ひ苦める夜

我が頭　息むろに處なし
ながが胸
　あゝ　我れに貸し給ひてよ
悶々　絕々
　たゞ　なが胸に
鳴らせ　その緒琴　我が悲歌に
　あゝ襟を開て枕せしめよ
　　慕はしの胸や
我が息　漏らすに處なし
なが唇
　あゝ　我れに貸し給ひてよ
炎々　熱々
　たゞ　なが唇に
解かせ　その眞珠　我が酒に
　あゝ我を抱て接吻せよ
　　慕はしの唇や

○寄小町

卿　憂色あり　戀ひか恨みか
　生ける身に　卒都婆をたてし　才女小町
卿を見れば　怫然として　噫
　さゝげてん　涙の露　せめてもの手向に

○吐鵑を聽きて

小夜更けて　かすめる月
　かけるや吐鵑　一聲二聲又三聲
戀に心を腐らす乙女　この夜　一代の名殘に
いで　いで　八千八聲　鳴きあかし
　鮮紅の血に　無情男子の腸　斷てよ

○夢

戀かと寄れば　卿の御姿
　くやし　夢よ
鬢のほつれを　かきあげて
　痩せます頬を　この胸に　心の響くこの胸に

○卿わが爲に語らずや

卿　わがために　語らずや　胸のうちを
　我れは聞かん　息をひそめて
友と友との仲なれば　心をおかず　語れかし
卿　わがために　踊らずや　紅の裳裾ふみしだき
　我れは歌はん　杯をあげて
醉と醉との仲なれば　心をおかず　踊れかし
卿わがために　旅せずや　逗子の濱邊
　我れは取らん　卿のかひなを
戀と戀との仲なれば　心をおかず　旅せかし

○吹けよ小供

吹けよ　小供　おもしろし　其竹笛を
　わには　地を履み鳴らし　おどりてん
狂へよ　我が身　おもしろし　其笛の音に
人　われを取りて　室に入るゝも

○或る微笑に巧みなる加奈太の婦人を見て

わしは日本　お前はオロシヤ
　島も行き來ぬ　隔ての海よ
通ふなさけの　絲と絲
　眸にものを語らせて
　　腕をとりたや　木の下影に

○痰に血のからみて出でければ

日は近し　『戀ひ死なば
　我が塚に鳴け　子規』
我れも逝くなり　血しほ流して

○さる戀に苦む男に代りて

『時鳥　鳴きつる方をながむれば
　月をからむや　雲の帶
　解てよいやら　惡いやら
結べば縦ぶ　針のあと

○また夢

笠をかゝげ　白刃を提げて　忍び來る
　是れ　何物ぞ
愕然　床を蹴　月を排して　外庭に出れば
　月光　空よりも鮮かなり
佳人あり　悄然として立つ
　血枯れ肉痩せ　雨を帶る梨花一枝
綰帛らず　恋しほれ　多恨綿々　地をにらむ
　志ばらく寄りて慰撫せんとすれば
したゝる口に　一語あり
　あゝ　彼の君　夢のかの君

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

樂評手前味噌

◎音樂學校春季演奏會

青柳生

これほどの大人數を、うまくこなすこと、並々の腕には六ケしかるべし。その聲調の亂れて、聽き苦しき醜躰を示さずやなど、憂へたるは謬りなりき。本校も來れ分校も來よと、幼きは十二三歳より、大も小も男も女も、柳櫻とこきまぜて百五六十ほどが、あやに歌へる單音の合唱『祝歌』は、よく揃ひ整ひて、些かの亂れ外るゝものなく、殊にはポーズのふし〴〵巧にして、意外の上出來なりしは、指揮者なる小山氏の譽れなりといふべし。且つこの歌は、『あゝゝゝ』の一部だけを除かば、歌曲の調和無類にて、空前にして恐らく絶後なるべき　皇后陛下行啓の紀念ともなり、さまで歌ひにくき者にもあらねば、須らく、その一部を訂正して、長く『東京音樂學校々歌』たらしむること、策の妙なるものならずや◉箏とヴアイオリンの合奏ほど、面白きはなかりき。こは、その出來ばえの頁かりしがゆえにはあらで、稍々滑稽の趣ありし故なり。先づ其發點に於て、兩者不揃にして亂雜を極め、進んで兩者の呼吸愈々合はず、實に滅茶苦茶の音流にて、紫よりエキスプレッションなどいふもの、薬ほどもなく、立て板に水を流せしとは、斯ることにや。たゞ音の連續の、情なくも斧にて切り出さるゝを聽くのみ。這れよりは、ピヤノと尺八とを洋曲にあはせて合奏せるなど、却て面白かるべし。其ヴアイヲリンの演奏部は、何を基として作りたてられたるものなるや知られど、三曲合奏の三味線の部を、そのまゝ西洋譜にうつして、ヴアイオリン部となさば、如何のものにや◉大幸田子の獨唱は、和洋何れとも、餘り大事を取り過ごして、小心翼々の如くに現はれ、子が特色たる何時の生氣を欠き、無理な原曲に拘泥せられたるに非ざやなど思はれたり。然し、其意、餘情を豐かならしめんとするにあることなれど、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとく、寧ろ却て思ふ存分精一杯のほどこそよけれ◉管絃樂入りの合奏『國の光』は、いふべき事も心付かれど、大村恕三郎君とぞ聞く人のフリユート、この日殊に生氣發動に充されて我儕の耳に入りしは、難有かりき。此人、恐らく管樂仲間の第一位なるべし。自愛せられたきものなり◉ヴアイオリンの二部合奏は、大小幸田子の出しものなりといふにも似ず、變化少くして面白からざる曲なりといはんか。これもバツハゆえなるべし◉橘子のピヤノ獨奏はベートーフエンのソナタなりといへど、例の如く人を擬ふ氣力を欠けるは恨めし◉聽きたきものは大幸田子のピヤノ獨奏なり。

◎同聲會春季演奏會

昨年の秋季と同く、この春も又、同聲會は學校が催せる演奏會に勝りて成功せるものゝ如く、凡て近年には珍らしく面白き音樂會なりしといふを得んか。この會と、同じ奏樂堂にはハウス指揮の下に開ける明治音樂會とは、蓋し近來音樂會中の白眉ならまし。これ迄何處の樂會に參しても、飽き足らぬ心地のみせしが、この會にて、始めて思ふ存分食ふたけ喰はせられたる如く、滿腹の快ありとやいはん。たゞ第一の合唱『ふるき都』のみは、非常の失敗にて、その亂脈なること、これが音樂學校生徒の唱歌にやと疑はるゝほどなり。假令へば『佳人のそで』の『そ』、『みへずなれど』の『み』、『金盃の酒』の『さ』などの邊にては、女聲方に滅法早く出るものなどあり、聞きぐるしきこと限なし。これは種々原因もあるべけれど、上眞行氏その指揮をやめて、ユンケル氏その任に當れることと確に一原因なるべけれ。ユンケル氏の如き辯勝ちの指揮方にては、歌ふもの仲々に苦しく、應々調子外れに流れ易すかるべければ、敦厚にして詩趣多き上氏を指揮者に据え置くこそ却てよけれ◉幸子君と内田とよべる山縣菊子君とのピヤノ、ヴアイオリン合奏なるベートーフエンのソナタは、兩者の氣合よく合して、非常の成効なりしといふべく、とても賴母木橋兩子が合奏の比などに非ず◉瀧廉太郎氏は、今度こそチヨッピリせる短かものならずして、仲々に長きベートーフエンものを奏せられて我儕を悅ばせたるは難有く、これも非常の大成効なりしといふより、評すべきなし◉兩ペリー孃と延子君とのヴアイオリン、セロ及ピヤノの合奏あり。延子君はピヤノを彈ぜられしが、ペリー孃のヴアイオリンこそ仲々におかしきものな

れ。その右の肩の關節に何か故障ありてか、妙に肩ばりてゆつたりせず、その弓を用ゆる樣、西洋館にて、木を挽くが如しといはん。されど、兩環ともユンケル氏の弟子と聞くたけありて、流石に元氣にして大膽なるは、歎賞するに足るべく、到底音樂學校の姬たちや、なまめける男生などの及ぶところにあらず。さはいへ、無論幸子君などの下にあるものと知るべし◎此の日、特に吾れ人を驚かしたるは、ケーベル博士の伴奏につれて、ユンケル氏が獨奏せるベリオ氏作のコンサルト、ミリテールなり。たゞ驚かしたりといはゞ、足りぬべく、蓋しその曲の壯快なるにもよれど、我儕如き俗耳にはこよなふ面白く、同氏來朝以來第一のものと覺えたり。昨年の卒業演奏會に幸子君のヴァイオリンを聽て泣きしも、たしか同じベリオ氏作のコンサルト第三番なりしと覺ゆ。依て思ふに、凡て氏の曲は、我が國人の樂流に合するものに非ざるか。此後とて、同氏の作を折々出し、その是非を試みられたきものなり◎管弦樂入りの合唱は、近頃既に兩三回これありしも、人聲多くは器聲に消されて、充分の成効を見ざりしが如し。蓋し、管の構造は、頗る人類發聲器の構造に似て、その音色互に相類似し、その强きもの、悉くその弱きものを吸收し去るにこれよらんか。故に二三百人の大勢なるオラトリオ樣のものならば、その管樂も大に合唱の妙を助くべけれど、音樂學校の如き二三十人の合唱にては、却て其妙を削くの恐れありといはん。而して、管樂をやめて、弦樂のみを加へたるこの日の『薩摩潟』合唱は、我れを以て見るに、無類の大成効なりしものゝ如し。この點に於て、我れは『讚美』の樂石君と、全く其意見を異にするものなり。弦樂は人聲と全く音の性質を異にするを以て『薩摩潟』の弦樂は、兩者互に相助け相潤飾し、頗るその妙を發輝せるに似たり。その中にありし人聲各部のソロも仲々美はしく出來たりしが、神戶絢子君のソップラノのソロに至りては、實に怪しきまで拙劣にして殆んど調をなさずといふも、過言に非ず。同子のピヤノとて驚くほどのものに非るは、既にいへるが如くなるも、この度のソロに至りては、更に甚しく、音樂學校若し此上ソップラノの名手なしとすれば、誠に心細きことならずや。生氣のなきは素より、その發叉もつれて頗る昂らず◎この日殊に遺憾なりしは、これほどの成効に、人出の少かりしと、ベリー孃がヴァイオリン獨奏の見合はせられたることなり。蓋しその奏せられんといへるゲンデーの曲は、曾て延子君の奏せられて、大に我れを打ちしものなれば、けふこそ比較し見んものと、待ち構へゆきたればなり。

新刊書

天則百話

天則百話は、加藤博士が曩きに『太陽』紙上に連載せる隨筆を集めて一冊となせるものなり、社會上、政治上、宗教上、其他時事の問題、百種を撰び、博士の平常の信仰と隨感とを記されたる者なれば、之によりて其所見の一斑を知ることを得べし、讀過の際、利する所多く、且つ面白く感ぜしもの少なからず、概して云へば博士の平常の所信を一層明瞭にせられ、種々の事柄に應用せられし者多分を占むるが如し、斯には唯此書の刊行を紹介するに止むることとせり（布川生）

家屋改良談

土屋元作氏 著

時事新報記者土屋氏の所著、日本住家の不便不潔を痛罵し、家屋改良の急なるを說き、虛飾を輕じ實用を尊び、跪坐を變じて踞坐となし、各室を區別し、雅を後にして美を先にし、衞生と經濟上に注意する等の方針を以て改良論を爲したるものなり、所說實際に適して吾人の概ね贊成を表する所なり、日本の家屋を以て武士の性情と對照して武士のテントなりと斷じ、分室法を論じて家族質の性情に影響する所大なるを云ひ、亞より來る害を擧けて踞坐を主張する等を始め今日住家の缺點と不便は擧けて盡さゞるなし、家政問題は文明進步の根本を爲す、有志必ず一讀して參考に供する可なり。（時事新報社發行定價三十錢）（靜淵）

中等教育 東洋史

棚橋一郞 編

本書は文部省の教科細目を本とし、活字紙質共其筋の告示を標準として編成せるものなりと云ふ、上古、中古、近古、及近世の四編に分ちて簡明の叙述なり、紙數百七十頁にして定價六十五錢（神田區裏神保町一、三省堂發行）（靜淵）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

外國地理教科書

三省堂編輯

中學及師範學校教科用に編纂せるもの。地名の傍らに英綴りを附し、或は旅行の道筋を記し、都會の人口等は皆新材料に依れり、附するに世界諸國々勢一斑を以てす、附錄として別冊外國地圖あり、本書と相對して參照すべく、此地圖の終りには都會人口より山川其他の重要なる表あり、是等は新機軸と稱すべく、一寸便利なるが覺ゆ、三百六頁にして定價七十錢、發行所同前。（布川）

三版 帝國地理教科書

三省堂編輯

本書は前者と躰裁より紙質まで、同一にして本邦地理を記せるもの也、本書にも附錄地圖あり、要するに全く教科用に編みたる者なれば簡單なるは當然なれども、標註として歷史上に關係せる事項を記したるなど、新式にして多く類を見ざる所、能き思ひ付と云ふべく初步としては適當の書なるを信ず、其旅行躰に叙する所は特に可なるを覺ゆ、定價五十五錢發行所同前（東根）

中學日本史要 上卷

山崎　大林合著

本書は中學初年級の爲めに編纂せるもの、其筋に於て撰定せる細目に據り、上古より後三條天皇に至るまでを叙述せり、紙數七十餘頁、頗る簡約にして文章は平易なり、神田錦町一丁目明治書院發行（東根）

天地有情

土井晩翠著　博文館出版　定價金廿五錢

『天地有情』とは、この書の題なれど『天地有理』といふこそ、却てよけれ。詳くは、前號なる『藤村の詩』中に評しおきたれば、讀者就て見られよ。その表紙を包める紙の印刷方には、仲々趣きあれど、表紙其のものに沒趣味なるは、かゝる詩的著作のために、遺憾とするところなり。されど、その袖珍形なるは、大によし。（有美）

片々

●男の敗德女の無學　報知新聞の田川生は、近時、或は男兒の敗德を以て、世の良家の細君の無學文盲なるに歸し、妙に兩者の關係に就きて、敗德男兒を辯護せんとするものあれども、この二者、其間何の關係する處なく、男兒にして、果して女兒よりも多學なれば、男兒は益、其品行を愼まざるべからず、多學なるが故に、其品行を恣にし、無學なる婦女の貞德を毀けて可なるの理由なしと痛論す。

●青年の敗行　同新聞の同生は、また青年の敗行の原因は、父兄の敗行に在りと論破す。

●婦人の服制　人民記者、婦人服制の改良を論ずる中に曰く、就中其特に改むべきは、帶及び下半躰に用ゆべき特殊の服を欠くとなり。……去れば吾人は我女服の長所を存すると共に、其短所を補ひ、巨帶を取り去ると同時に袴を用ゐ、以て衛生上に於ける申分なき服制を用ゐるのみならず、併せて美觀上に於ても、亦甚だしき不躰裁に至らざらんことを望む。といひ、此改良を施さば、以て女學校の躰操に便利なりといへり。

●婦人問題、　千代田日報記者の、『婦人問題』に曰く、凡そ人間社會に於て、汚穢の極、悲慘の極は、獨り藝娼妓なるものゝ境涯なり。今日婦人問題の最急なるものは、これを改良するに在り、世の愚父愚母として、其娘の身賣をなさしめて、これを孝行なりと賞讃するが如き無きに至らしめよといへり。然れども、敢て廢娼、廢藝妓を斷行すべしといふに非ず、曰く、

蓋し廢娼の議、口言ふべくして事行ふ可らざるは社會の實際之れを證す、人間社會の智識のみは高く昊天に達せんとせるにも拘はらず、其道德心未だ禽獸界を距る甚だ遠からざるの低度に在る今日に於ては、啻に此陷穽を除去する能はざるのみならず、或る政略の爲めに却て之れが必要を感じつゝあるは何人も既に首肯する所、然らば彼の不幸なる幾多の女子は、到底得て救ふべからざる乎、自から好んで之れに陷る者は固より之を救ふに由なし、是れ所謂自暴自棄の徒にして自殺に出るもの、人の自殺は道德も法律も得て制止する能はず、只だ他の爲め、殊に父母の爲めに陷らるゝものに至ては眞に是れ不幸可憐のもの、焉ぞ之れを救ふの道なしとせんや、

と。記者の言の如くんば、所謂陷穽なるものは、依然存在して、子女を强いて、之に陷らしむるをも防止することを得じ。記者の言の頗る模稜曖昧にして、矛盾なるを惜しむ。

●緣談の條件　時事新報記者が、緣談の條件として、曰ふ處のもの左の如し。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世間の父母たるものが娘の爲めに婿を選ぶに先づ第一に本人の性質品行に重きを置くは無論にして其點に就ては全く申分なしとするも若しも其父が例の醜行男子にして家に異母の兄弟姉妹あらんには如何す可きや既に其家に嫁して妻と爲るときは異母の兄弟姉妹は即ち夫の兄弟姉妹にして兄と呼び妹と呼ばざるを得ず假令ひ本人には申分なきも最愛の娘をして素性も知れぬ賤しき女の腹に生まれたる子女と兄弟姉妹の緣を結ばしむるは果して忍ぶ可きや否や又かゝる家の娘を娶るも右と同樣にして自家の息子に不倫なる子女輩との交際を强ひんとするものなり天下の父母たるものにして眞實その子を愛せんには婿たり嫁たる本人の性質品行に重きを置くと共に異母兄弟の有無を最大の肝要條件として緣談を決す可きものなり

これぞ、男子の敗德を攻擊するの際、罪の結べる實なる、私生兒、庶子を排擊して、人並の社會に立交らざらしめんとするものなり。夫れ、不法なる父母の罪は惡むべし、されど、其不法の極生兒にまで、其罪を及ぼすべきものなるや。

●私生兒の父、　曩に蓄妾實例を以て、天下を聳動したる萬朝報は、五月六日以後、また新に、『私生兒の父』なる題を設けて、市內各區役所に於ける私生兒の調査をなし、其父と母との身元を探明して、其醜惡を暴露し初めたり。同新聞の云ふ所によれば、去年七月戶籍法の改正以來、市內各區役所に於ける私生兒の屆出數非常に增加したりと。既に暴露されたる中には、伯爵黑田淸隆、梅博士、大江卓の如き、名士の名を見る。これは、正に、蓄妾實例の補遺なりといふべし。名流紳士にして、今頃は、もう出されるか出されるかと、ヒヤ〳〵と危き思ひをするもの。必ずや多からん。

●伏竇女學校、　中央新聞、此頃頻りに、鳥海女學校なるものゝ醜態を暴露す。記述するが如きもの、夫れ果して信乎。校長なるものは、これを揭載されて以來、隱然の運動をなして、笑を免れんと務め、苞苴を行ふなどいひ、而して、公に出でて、嚴乎として、正を爭はざるを見れば、醜事、信ずべきものあるに似たり。彼醜事の如き、擧ぐる所の十中、二三を以て事實なりとするも、（中には女學校の塾舍として到底行れがたきとあり、一見其の誤聞たるを知る）女學界の爲に、此校の如きものゝ存在を許すべからず。果して、記述せらるゝが如き事、無しとするも、事の爰に至る、必ずや欠點過誤なきを能はず、されば、身教育に在るものゝ本分として、自から潔く責を負ひて、過ちを天下に謝し、而して善後の策をなすべし。兎に角も、由來世話好なる當路者は、かゝる時こそ、至當の處分をなすべきに、それも爲すやうにて無きは、如何なる次第にや。

●伏竇　美名の下に醜行あり、慈善の名を以て詐欺を行ひ、教育の名を以て、隨落を奬むるものあり。女學校の門戶、外は女德の理屈に固めて、隱れたる處に不德醜事を藏するとなしとせず。女學界の景氣づくに隨つて、かゝるものも、有勝の事なり。

●人民新聞　の聞是非中、左の言あり。

女學校は征伐せざるべからず中央鳥海女學校を征伐す亦善し請ふ呑舟の魚を漏らす勿れ東京市神田區一ッ橋通に〇〇〇〇〇〇〇なるものあり此の校の生徒は玉石混合薰蕕同器にして令孃もあり妻君もあり妾もあり藝妓女郎上りもあり所謂地獄もありといふ弊風一校に滿ち爲に良家の處女を誤ることなしとせず同校生徒の製作品は往々にして宮中に入り亦嘗て　皇后陛下の幸を辱うす生徒の撰擇深く愼重を致さゞるべからず

吾人、其是非を知らず。されど事、女學界に關し、今後の戒心を要すべきものなり。故に之を轉載し來る。

●豆腐屋の二百五十年祭　岡山市東中島町豆腐商中島屋事常原吉衛は當代にて十五代二百五十年間其業を繼續したるものなるが來十四日初代の追遠大供養を催する由、一家一業に從事すると十五代二百五十年、實にこれ家法嚴立の美事に非ずや。

●諸新聞の女學文壇　（本誌〆切まで）

◎令孃鑑　　千代田日報連載
六鄕芳子〇京極禮子〇小幡淸子〇秋元光子
◎婦人問題（再び）　同　五月九日
◎女子の地位　同　十三日
◎各國女傑叢話（柔撫流）　東京朝日新聞五月三日以後連載
露國女帝カタリナ◎マリー、アントアネット◎
◎往時上等社會の衣食の有樣（城南逸士）　同　五月十、十一、十二日
◎夫人の素顏（大山捨松夫人の事）　報知新聞五月九日以後
◎男の敗德女の無學　同　五月七日
◎靑年の敗行　同　同　十四日
◎婦人の服制　人民　同　十日
◎私生兒の父　萬朝報五月六日以後連載
◎男女の學說　時事新報連載
◎女大學評論（自第十一回至第十四回）　同
◎緣談の條件　同　五月五日
◎妾腹の子〇婚姻は强ふ可らず　同　同　六日
◎日本婦人問題（本多庸一氏說）　同　同
◎家計に秘密ある可らず　同　九日
◎伏竇女學校　中央新聞連載

時　報

◎學　事

●高等女學校協議會　五月八日より以後四日間、伊藤東京府高等女學校長外十七名の高等女學校長は、帝國教育會に於て、協議會を開き、高等女學校へ國庫補助金を附與せられんことを文部大臣に建議の件高等女學校教授細目の標準を編纂せられんとを建議の件小學校正教員より任用せる高等女學校職員俸給額の標準を一般に定められんとを建議の件文部省に於て每年一回高等女學校長を招集し會議を開かれんとを建議の件高等女學校長より二名を高等教育會議員に撰出せられんとを建議の件女子體教奬勵の方法▲寄宿舍生徒の制限▲修身科教授の法針及教授細目▲專門教員と普通教員との利弊▲技藝專修科に於て二ヶ年の豫備科か置くの必要なきか▲寄宿舍を設けざる場合寄留女生徒の取締方法▲室內體操場を設けざる學校に於て生徒に體操遊技を課するの方法▲教科用書撰定の方法▲高等女學校寄宿舍制度の利害▲高等女學校生徒に修學旅行をなさしむるの可否▲高等女學校に於る漢文科を必須科とし之を二學年より課するの議高等女學校生徒の小說を讀むを禁止するの件高等女學校生徒の體操服を一定するの可否若し可とすれば其方法如何高等女學校生徒結髮の形式を一定するの件女子適當なる通常禮服を制定せられん事を其筋に建議するの件等に關して、協議したり。

●女子體育法　大學教授ドクトル、ベルツは日本女子の體育法に就て、夙に研究する所ありしが、此程に至りては親しく華族女學校及び女子高等師範學校等に臨みて、生徒の姿勢動作殊に體操に於ける手肢の運動に注意し、漸くにして一個の定說を得るに至りたれば、五月十三日女子高等師範學校內に大日本婦人衞生會員及び大日本體育會女子部員を招集して其意見を演說せり。

●帝國婦人協會授業始　下田歌子女史を會長とせる帝國婦人協會の實踐女學校女子工藝女學校は、五月七日其授業始式を擧行したり。來會者は細川華族女學校長、高崎男爵、三島子爵同夫人、土方伯爵夫人等數十名にして、夫れ〳〵の式ありて後、立食の饗應ありたり。會場の飾付、正面の床の間に、常信筆の三幅對の軸物を掛け、また古代の鏡面を飾付け紫縮緬の幕を絞上げたるを、また來會の車夫馬丁馭者出入の商人等へは、同會の徽章を染拔きたる手拭に祝儀を添へて配與したるなど、以て、同會の性質の一端を伺ふべきものありしとかや。

●女子技藝科生募集　女子高等師範學校にては此度新規則により技藝科を設け、既に若干名を入學せしめたるが更に補缺若干名を募集する由。志願書の受付は六月廿日までにて、入學試驗は同月廿六日より施行の筈。試驗科目は體格、國語、數學、理科、裁縫、習字、毛筆畫等にて、志願者の資格は師範學校女子部、修業年限四ヶ年の官立高等女學校卒業生及之と同等の學力を有し、年齡十七年三ヶ月以上廿二年三ヶ月未滿にて夫を有せざるものなりと。

●東洋英和女學校　にては新に買入れたる麻布東鳥居坂町なる高燥の敷地に、三層の校舍を建築することゝなし、工事一切をガーデヤン技師に托し、當秋季よりは新校舍に於て授業する筈といふ。

●日本女子大學　寄附金募集を中止し居たる同大學は去る八日帝國ホテルに於て創立委員會を開き大隈伯岩崎男等出席し再び募集を始むる事となりたり。

◎會　合

●橫濱婦人矯風會　橫濱有志婦人の企畫に係る橫濱婦人矯風會にては近來海外渡航婦人の義に付往々聞くに忍びざるとあるより、此際義俠なる淑女に訴へ之を救濟するの方を講究せんとの趣意にて、去る八日午後七時より橫濱會館に於て公會を開き、當夜は島田三郞美山貫一兩氏に出席を請ひ演說會を開きたり。

●慈善音樂大會　府下豐多摩郡角筈村なる女子獨立學校同窓會の發起にて、毛利公爵夫人、鍋島侯爵夫人、樺山伯爵夫人等を始め、其他朝野の貴婦人令孃等の賛成を得、去る六日午後一時より上野音樂學校に於て慈善音樂大會を催し、其收入を以て同校費の一端に供したり。

●夫人慈善會の賣高　前月開設せし東京夫人慈善會の上り高は寄附を併せて三千圓に及びたれ共未だ悉皆收金濟に至らざるをもて近日取纏の上養育院に寄贈し併せて會員一同へ報告する筈なりと

●茶話會　帝國教育會長辻新次氏は去る十一日より同會樓上に於て茶話會を開き同會議員及委員並に目下上京中なる高等女學校長一同をも招待し、席上、自から女子教育に就ての意見を述べ、女子大學設立の必要を說きたりと云ふ。

●婦人仁愛會　福井縣婦人の一團體なる婦人仁愛會は、愈會務確定したるを以て、先般土地建物を購入して、會場に宛てたり。

●大日本女學會の晚餐會、　大日本女學會にては、會員五千人に達したるを祝する爲、五月六日上野精養軒に於て、名譽會員贊助員等を集めて、晚餐會を開きたり。

●岡山孤兒院音樂隊　は、いたく人士の同情を惹き、其幻燈音樂會を開くや、去る五日の青年會館に於ける、六日の中央會堂に於る、共に非常の盛會にして、また十三日夜の橫濱に於て開きたるも、同樣の盛會なりしといふ。なほ十四日夜は澁澤榮一氏邸に、十六日夜は、大隈伯邸に聘せられて、奏樂幻燈をなしたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎人事

●綠綬褒章下賜　實業に精勵せし廉を以て賞勳局に於て山形縣士族本間光美氏に綠綬褒章を下賜したり賞狀に曰く「資性溫厚夙に力を畎畝に竭し刻苦多年種穀の改善を圖り馬耕を里民に傳授して耕耨の勞を省き旱損水害卑濕三種の地に試田を設けて乾田の利あるを知らしめ教師に從ひ郡村を巡回して作業の得失を講話し每歲資を投じて農具を給與し或は地主と佃戶との間に生じたる弊習を矯正して作德米定引法及備荒貯蓄を設け肥料を貸與する等多方勸誘效驗玆に見はれ庄內米の聲價を東京市場に博するに至る洵に實業に精勵し衆民の模範たる者とす」

●綠綬褒章下賜　實業に精勵せし廉を以て賞勳局に於て府下荏原郡六鄕村川田谷五郎氏に綠綬褒章を下賜したる賞狀に曰く「資性溫厚夙に心を殖產に傾け意を貿易に注ぎ地方固有の麥稈細工を應用して草莖帽子地に促せんことを企圖し刻苦研精初て麥稈眞田紐を按出し標本を海外に試送して賞讃を得製造を委託せられしを以て爾來工場を各地に設て多く徒弟を訓練し廣く衆工に傳授し人を所在に派して麥桶の撰擇採收を奬勵し更に進て晒白法染色方を改新し製品愈優に販路益擴まる今や輸出重要品の一に算せらるゝに至り細民子女の生業に裨益を與ふる少なからず洵に實業に精勵し衆民の模範たる者とす」

●藍綬褒章下賜　大阪府大阪市西區新町南通一丁目佐野與兵衛氏は公同の事務に勤勉せし廉を以て賞勳局に於て藍綬褒章を下賜されたり賞狀に曰く「資性篤實夙に戶長の職を奉し爾來町會區會府會の議員に舉られ尋て市會議員市參事會員及各種の委員と爲り任滿るも再び撰舉し能く自治の發達を圖り最も力を勸業教育土木衛生に竭し殊に費用の辨償は一切之を受けず委員の報酬金は舉て之か公費に寄附する等公同の事務に誠實勤勉すること多年一日の如し其勞效顯著なりとす」

●美談一束　女房の貞節　長野縣小諸、新莊儀三郎妻アサ（二十九）（太平新聞五月四、五、六日）○寡婦節を守り、幼兒學を好む　播州宍粟郡下三方村字福知の木下太三郎（八才）、妻フデ（三十）（國民新聞五月七日）○長崎の家孝子あり　島根縣簸川郡西田村大字草田の安宅甚之助（國民新聞五月五日）○白菊の譽　小石川區關口臺町加藤忠吾娘キク（國民新聞五月四日）

●孝子受賞二件　群馬縣佐波郡剛志村字中島の定七養子、郵便配達夫齋藤谷五郎は、操行篤實の廉を以て、縣知事より賞狀并に金五圓を賜はりたり。○新潟縣中蒲原郡津島村字西島の農植木愼作方雇人近藤淸吉は、父母に孝なるの故を以て、縣知事より賞金賞狀を受けたり。

◎雜事

●流行夏衣の相場

婦人の衣裳

紋薄御召十三圓より十五圓迄　縞御召九圓五十錢より十三圓迄　紺絣御召十二圓より十五圓迄　縞絽縮緬十一圓より十二圓迄　絽詰袖模樣十二圓より十五圓迄　絽振袖模樣十五圓より十八圓迄　友禪絽十二圓より十五圓迄　縞染絽九圓より十一圓迄　友禪絽縮緬十二圓より十七圓迄　紺絣御召十二圓より十五圓迄　小紋明石八圓五十錢より十圓迄　絽長襦袢十五圓より二十三圓迄　縮緬長襦袢十六圓より廿三圓迄　絽紺絞浴衣十四圓より十六圓迄　縮緬浴衣十八圓より廿五圓迄　天鵞織三圓前後　壁上布六圓より八圓迄　壁透綾六圓より八圓迄　浮橋織九圓五十錢より十一圓迄　結城紬紺絣十圓より十六圓迄

婦人帶地

友禪鹽瀨十五圓より三十圓迄　絽繻珍十三圓より廿五圓迄　縞絽十三圓より十八圓迄　縞絽袋織十二圓より十五圓迄　博多單十圓より十三圓迄　友禪絽九圓より十三圓迄　綴錦百五十圓より二百圓迄　綴錦片側三十圓より六十圓迄　縞珍十五圓より五十圓迄

此外風通鹽瀨（十三圓より十五圓迄）は品格好く模樣紋柄種々あり淸涼織（十圓より十三圓迄）壁絲を以て織立てたる能く汗をはじき蓬萊織（十圓より十二圓迄）は繻子の代用を爲し柄も最と高尙なり

男子向夏衣裳

壁絲織八圓より十五圓迄　紺セル織十圓より十二圓迄　紋上布十圓より十五圓迄　白絣越後六圓より八圓迄　藍縞越後六圓より八圓迄　平御召十一圓より十五圓迄　壁市樂十一圓より十五圓迄　結城紬八圓五十錢より十六圓迄　本上布十八圓より六十圓迄　越後上布八圓より十五圓迄　近江生平一圓五十錢より二圓迄

同　單羽織

平御召九圓より十三圓迄　縞紺上布五圓より八圓迄　壁絲織九圓より十一圓迄　黑絽石持八圓より十三圓迄　小紋絽石持八圓五十錢より十圓迄　絽兩面十八圓より廿五圓迄　色絽石持八圓より九圓迄

同　帶地

筑前博多四圓六十錢より八圓迄　紋博多六圓より十圓迄　明珍織七圓より九圓迄　綴織十五圓より廿圓迄　縞絽六圓より八圓迄　博多單三圓より四圓迄

同　袴地

仙臺平八圓五十錢より十八圓迄　縞絽十三圓より十六圓迄　村上平九圓より十五圓迄　嘉平治平二圓五十錢より三圓迄

●足利友愛義團の廢娼建議　同團體は是まて公共の事に付き盡力したる功績も少からず今回は栃木縣知事に宛て廢娼の建議を提出せり。

●女學雜誌　第四百八十六號　社說三編、第一は外國人何の爲めに來遊すると題して彼等が日本に來るは手當り放題に花を折らんが爲めなりと喝破し、交際社會を廓淸して醜行汚德の徒を驅逐するを以て內地雜居準備の一に數へたり、第二は當今の腐敗何かあらんと慨し巧に當世を冷罵せり、第三は支那の爲めに憂ふるを止めよと告け杞憂の無益を嘲ける、ともに立論奇拔也（新北陸、五月八日）

●女學雜誌　社說には外人の日本に來るは其本國の交際社會に猫の面を冠りて究屈に耐へず本來の獸慾を逞ふせんとするの評より說き起して將來の交際上心得へき事を論したり其他の記事例の如く高尙にして家庭上有益なるものならざるはなし體裁の優美にして印刷の鮮明なる亦雜誌中の王なるべし（五月七日、海南新聞）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

海舟餘波（批評第三回）

◉米澤新聞（四月十五日）

該書はこれ女學雜誌主幹巖本善治氏の著述に掛る蓋し氏十數年來海舟伯に師事し伯を訪ふ毎に伯の高談卓論を聞き來り直に之を筆記して後日の看に供せられしものなり卷頭先つ伯の肖像を掲け尙ほ伯が嘗て山岡鉄舟を吊はんとて筆を奔らせ吊文と偈とを起草せられし眞筆の石版摺を載す其の風采を想望して漸々讀み來らは宛然伯の談笑を聞くが如し著者又た伯の談辭伯の語路盡く其の儘を描寫せられしを以て興味更に多きを覺ゆ本書亦明治近代の活歷史たるへく往々にして世上未た知らさる所を知るを得へく他の徒に伯の片言隻語を蒐集するものと大に趣を異にするあり伯を知らんと欲せは此の書を繙かざるへからざるなり、

◉中央新聞（四月三十日）

名士の談聽くに足る況んや智慮、機略、才學一世に秀でたる海舟先生の談に於いてをや此の書著者が數年の間海舟先生を訪ひし度の物語を其儘に記せしもの面目見るが如くにして或は政治に或は文學に或は宗教に或は雅に或は俗に談只だ談片に止まれりといへども亦偉人が胸中を思ふに足りはた後進が指針となすに足る誠に好著といふべし。

◉新世紀（第百十五號）

偉人はそれ巨鐘の如きか、大く叩けば大なる響を發し小く叩けば小なる音を發す、大小の音只それ叩く人の如何に由る。若近代に於て其人をもとめば勝海舟伯か。世の海舟を論するもの多くはその一部を捕へて以て海舟伯を月旦せんとす、是れ大ひに誤れり、近代世上に流布する伯に關する著少からず、然れども多くはたゞ一部分を表すに過ぎず。されば是等の書を合して而して後に虛心、伯に對すれば聊か彼の面目を了し得べきか。此書開卷先づ「氷川のおとづれ」を記して此老偉人の居を詳記し「淸話のしらべ」は簡決明瞭に伯の語調をそのまゝに寫して恰も彼と坐して語るの思あらしめ維新前後の外交、失策その他を記し、「松隈內閣」の事に及び、「懷舊しなさだめ」に於て伯が寸鐵殺人的の古人評を揭げ「希聲大音」と題して伯が得意の人生觀及び、處世の道を述べ最後に「破默建言」と題して伯の歌へる「無聲々却大、淵默勝多言、雲霄一孤鶴、高舞向朝暾」の意を記せる僅々二百頁に足らざる小冊子なりとは雖とも伯の風貌を窺ふに足れり、題して「海舟餘波」と云ふと雖とも之は著者の謙辭にして、是れ迄ありふれし書に比して勝りよく伯の風丰を描出せり、たゞ書中〇〇、或は△△を以て特更に姓名等を秘せしは聊か隔痒の感なきことを得ず。

◉上毛新聞（四月六日）

巖本善治氏の選に成り未だ世に顯はれざる談話のみを集めたり明窓の下之れを繙かば故氷川伯の面目紙上に躍如たらん。

◉山陽新報（四月廿五日）

勝海舟翁逝て未だ久しからず而して國民の翁を追想渴仰する甚だし本書は翁が在世中日々來客に接し機に應じて急喝短評されしを巖本氏の筆にせしもの偉人の一言一句審かに味ひ來れば悉く金玉の辭に非ざる無し嗚呼死せる英雄活ける國民を敎ふとはそれこれを謂ふ乎印刷鮮明体裁宜しく一本を購うて長へに偉人の面目を想見す可し　四月廿五日、山陽新報

◉鎭西日報（四月十九日）

海舟先生は當代の偉人なり卓見一世に高く眼光百代を厭す而して其言悉く死生の境を經て出て來りたる者とす故に政治家行き新聞記者行き書生行き世を憂ふる者平ならざる者皆行て以て先生の膝下に集り其言を聞かんと欲せざるはなし而して先生の言や片言隻語と云へ共無限の趣味を帶び其口を突きて出る處の熱罵や縱橫の諷言や皆俗人の腐腸を一掃せさるはなし天下の人皆風を望みて先生に歸服する故なきにあらざるなり編者岩本氏又先生に親近する事多年而して珠となりて飛ぶの先生の咳唾を集めて以て此に此書を出し天下の人をして先生の淸音を聽かしめんとす海舟先生の高風を聞きて一度其膝下に至り先生の談話を聞かんと欲せしもの少なからず而して先生已に去つて白雲に乘して仙鄕に遊ぶ亦其影をたに見る能はす憾なき能はざるなり今岩本氏の海舟餘波を讀まば心胸快然以て平生の恨の幾分を慰むるを得ん好著と謂ふべし。

◉秋田魁新報（四月廿六日）

巖本善治氏が翁に親炙して得たる隻言片語を筆錄し達識にして至誠善謀にして果敢而かも功を決して居らさる偉人か平生を叙して微を穿ち細に入り誦者をして感發自憤の氣を起さしむるもの獨り偉人の薰化のみならず筆者の活筆與つて力あらざるを得ず。

◉福岡日々新聞（四月廿一日）

是れ故勝海舟翁が親しく著者に語りたる談話を筆記したるものにして話題は今古雜多事項に亘り且多くは翁の就眠前最新の談話に係り翁の識見風丰紙上に躍如たるものあり定價金三十錢東京府

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY